

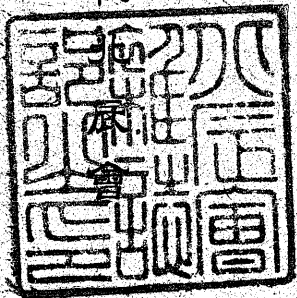
明治三十一年二月二十五日發行

(非賣品)

# 北辰會雜誌

第拾四號

第四高等學校



北辰會雜誌第拾四號目次

詠辭

論說

先天知識の有無を論ず 講師 西田幾多郎  
 道徳と經濟 島村他三郎  
 厭世と樂天 春秋原在文

雜錄

無品親王服色考 教授 高橋富兄  
 レオバアテイ 太 郎 生  
 『僧』列爲斯附妹毛野 在大學 太 郎 生  
 武道初心集拔抄 河原義山

文苑

梅のかたを愛づる詞 香村茂富  
 春月 草野時雨

歌數十首  
 今様五首

俳句二十五句

送田邊秋洋之大坂序 教授 村上函峯  
 紀鴻宮儼祭事 講師 浦井信  
 詩十數首

批評

本誌第十三號を讀む 太液漁郎  
 馬卿の君に寄す 臨川子

雜報

皇太后陛下の御崩御。迎歲辭。天惠の好期。岡村博士を送る。劔術柔術寒稽古。敢て滿校の有志に檄す

詠辭

明治三十年一月十一日 英照皇太后青山御所ニ崩御シ給フ  
 越テ二月八日 大葬ヲ舉ケサセラル 諸親王諸王及ヒ文武百  
 官墨衣徒步 靈柩ニ扈從シ京都月輪山ニ藏メ奉ル 嗚呼哀哉  
 伏テ惟ミレハ 英照皇太后ハ 先帝ノ臨御ニ方リ位ヲ蘭殿  
 ニ正ウシ體ヲ玉展ニ齊ウシ給フ當時國歩艱難内憂外患荐リ  
 ニ臻ル 先帝霄衣旰食宏圖英略以テ裕ナ後昆ニ垂レ給フ其  
 屯難ノ間機密ヲ贊シ壺政克ク諧ヲキ内助懿徳ノ多カラセ給  
 フコトハ中外ノ瞻仰シ奉ル所ナリ 今上陛下登極以降明治  
 中興ノ大業ヲ恢弘シ 先帝ノ基緒ヲ宣揚シ宇内萬方ニ烜赫

セシメ給フ其毓德輔導ノ力蓋シ預テ多カラセ給フ所ナラン  
青山御所ニ垂簾シ給フニ及ヒテハ躬桑蠶ヲ勸メ儉德彌隆ク  
心ヲ民瘼ニ悉クサセ給ヒ災アレハ則之ヲ賑ハシ疫アレハ則  
之ニ施シ給ヒ仁慈黎庶ニ洽シ實ニ萬世母儀ノ龜鑑ト稱シ奉  
ルヘシ舉世皆壽考福祉ノ無疆ヲ祈リ奉リシニ一朝忽焉トシ  
テ登遐シ給フ嗚呼哀哉 大葬ヲ舉ケサセラル、ニ方リ億兆  
ノ臣民 靈柩ヲ奉送スル者ト奉送セサル者ト無ク嗚咽涙ヲ  
灑キ桂月ノ光ヲ失フコトヲ悼ミ玉輝ノ復ヒ仰ク能ハサルコ  
トヲ悲ム爰ニ本校職員學生恭シク齋場ニ列シ至誠以テ遙拜  
ノ式ヲ舉ケ仰テ西南ノ天ヲ望ミ謹テ誄ヲ陳シ奉ル第四高等  
學校長正六位勳六等 臣大島誠治誠恐誠懼

## 北辰會雜誌第拾四號

### 論 說

先天智識の有無を論ず

先天知識の意義

講師 西田幾多郎

余は今少しく先天知識の意義を明にせむと欲す何となれば此の意義を誤解せる爲め先天知識の存否に付往々無根の攻撃をなす人なきに殆どざればなり

先天知識と如何なる義を蓋し經驗に先つて存する知識と云ふの意あるべき然らば先天知識の存在とハ吾人が未だ經驗せざる前已<sup>レ</sup>或 Ready-made knowledge ありと云ふある乎 古來先天論者多しと雖とも未だ斯の如き知識ありと明言せる人あるを聞かず Plato の如き抽象的知識ハ凡て前世記憶なりと云ひしも人生れあうら此の如き知識を有せるにあふと生後の經驗に連想して起る者と云へり氏の Reminiscence の説これなり又 Descartes の如き或る理想(神)ハ人心ニ印象されたる如く Innate なりと云ひも能く之を究問する時と唯此れ如き理想を生ずる Innate faculty ありと云ふに過ぎざるの如し獨り先天知識を上げ如き意義に解一<sup>レ</sup>大に之を攻撃せる人は夫の Locke があるのみ然りと雖ども恐らく是全く氏れ偏見に本くなきを得むや夫れ知識の經驗と共<sup>レ</sup>始まり其發達するに從ひ具體的をり抽象的に入るは事實上疑ふ可かざる所誰か人經驗なくして事

物を知り得ると云はむや况んや高尚ある知識も於てをや若し萬一先天論者の云ふ所をして盡く「ロツク」に解せる如き者あらざれば實に是れ荒唐無稽の甚し於者よりて之を駁するの價值に有せざるものなりと謂つべし

今少しく審に所謂先天知識の存在論ある者を見る時は直ちに向に述べたる如き淺陋ある者よあらざることを發見すべし夫れ先天知識の存在を云ふに決して完成せる知識が先天に現存せりと云やゆゑに Leibniz が *Nouveaux Essais sur L'entendement humain* と *Avant-propos* と曰へば “It is true, that we ought not to imagine that we can read in the soul, these eternal laws of reason, *ad aperturam libri*, as we can read the *Edict of the Praetor* without or research; but it is enough, that we can discover them in ourselves by dint of attention when the occasions are presented to us by the senses” と此等の論者以爲らく知識は盡く經驗と共に始まるは疑ふ可からざる事實なれども之を以て直より凡て知識は經驗より來るの證となすを得ず Kant の *Kritik der reinen Vernunft* に始るに “Wenn ober gleich alle unsere *bekanntniss mit der befarhung* anhebt so entspringt sie darun doch nicht eben alle, aus der befarhung.” と云へば蓋し知識は兩種の別ありて Particular and contingent knowledge 及び之より抽象せる者よりつゝ Strictly universal and necessary knowledge 是なり前者は固より經驗より來り後抽象力に由つて漸く具體的より抽象的に趨く者なりと雖も後者も決して經驗より來れる者にあらず何ぞあるに「ライフニッツ」曰へば “The senses, although necessary for

all our actual cognitions, are not, however, competent to afford us all that cognitions involve; for the senses never give us more than examples, that is to say, particular or individual truths. Now all the examples, how numerous soever they may be, are insufficient to establish the universal necessity of this some truth; for it does not follow that what has happened will happen always in like manner.” と其他「カント」「ライフ」等の先天論者も皆夫の *Strict universality and necessity* なる特質を斷して經驗より來る能はざるものとなせり夫れ既に己に經驗より來ざるの知識ありとせば其源を安むる必とや之を吾人の心中に求めざるべからず「ライフニッツ」は之の彫刻に用ゆる石の文理あるを喩へたり之を以て觀るに所謂先天知識といふ心の *Predisposition* に本づき *Fundamental knowledge* の謂よりて而も其先天と名くる所以の者は吾人より之を知覺を得るの前後を問はず經驗より先づて心中に存する *Faculty* 本くを以てなり故に所謂先天も存すと云ふべしは決して *Ready-made knowledge* ともならず唯先天知識を生ずる *Faculty* なる而已又此等は *Innate faculty* と雖も全く經驗を離れて働く者よあらず經驗は實に之を顯露するに欠くべからざる事情なり「ハミルトン」其心理學中 *Patricius* は語を引き

“*Cognitio omnis a mente primam originem. a sensibus exordium habet primum.*”

此一語以て先天知識論を盡して餘蘊なきを云へり

以上述べたる所は主として「ライフニッツ」の先天知識論ありと雖も其他の先天論者も大抵之と

大同小異なるか如し此等の先天論に於て其知識を相異なる二種に分ち其一は決して單に經驗より抽象し來る能はずと説くハ余の大に同意を表せる所なり且つ又此種は知識を名けて先天の知識と云ふ固より不可あるかゝるへし然れども唯其本なる Innate faculty の意義及び此の知識を名けて先天とあす所以の者も就て少しく論ずる所あるへからず

先天知識の本たる Innate faculty とは如何なる者か「プラトニー」「プロチナス」等に從へば之を First truths 即ち今の所謂先天知識を直に知覺する一の Special sense 乃如く解し人ハ生來かゝる Faculty を有する者となせり近世の先天論者 Cudworth, Walebranche, Schelling, Cousin の如きに至ても幾分か此の如き傾向なしとせず然りと雖も今日の心理學より之を考ふる時は或る一種の知識は限と特別なる一は知覺力あることとて所謂先天知識と稱する者も之を知るは順序方法の毫も或る抽象的知識と異なる所なし次に又假令此の如き Faculty 先天に存すると想像するを何故に獨り此の Faculty に本く者を名けて先天知識と云ふや其他の Contingent knowledge の如きハ全く外より來り先天よ之か Faculty をしとあす乎空氣の振動と音と感し「イ、サー」の振動を光と感ず是は何も由て然る感覺の能力なくして感覺を生し得る乎吾人ハ刺激を與ふる者と外物なれとも之を感ずるは吾人ハ先天の感覺力に因るにあらずや「アリストートル」も己に知識の凡て先天ハ其は Avillage を有せりと云へし夫れ己ハ知識は凡て先天ハ能力に本て生ずる者とせば何に由て一を先にし一を後とする乎

既ハ己に先天に Ready-made knowledge あるなく又之を知覺する特種の知覺力なく且つ之ある

も先天ハ意義を獨有せしからずとあすハ先天知識の存在ハ畢竟何の謂なるや余以爲らく先天知識の Faculty とハ決して之を知覺する特種の知覺力の謂にあらず凡て知識を生ずる一の Fundamental activity の謂とて而して又其 Activity と云ふも感覺力記憶力概括力等の Activity の如く Material activity の謂とてあらず「ライフニツ」も夙に此点に注意し "It is not a naked faculty which consists in the mere possibility of understanding them; it is a disposition, an aptitude, a preformation, which determines our minds to elicit, and which causes that they can be elicited; precisely as there is a difference between the figures which are bestowed indifferently on stone or marble and those which veins mark out or are disposed to mark out, if the sculptor avail himself of the indication." と云へり且つ又 "A priori" なる語も決して之を時間上の義に解す可からず先天では Logical priori の意なり故に余は論ぜむとすハ先天知識と他の知識の基礎とある知識より即ち所謂 Predetermined forms of knowledge と謂なり此等の知識は決して經驗より導き得るもれもあらず經驗は却て之を Presuppose する者として深く經驗は Sine qua non たる Synthesizing activity に本凡ての知識に於て Principia essendi なる者なり是を實に先天知識の先天たる所以あり

斯れ如き先天知識ハ意義は凡ての先天論者が唱道せる者にあらず元來先天知識論とは其由て來る遠く源を希臘哲學に發し「プラトニー」の Reminiscence の説の如く其著名ある者にして中古の世

の一時衰へざるも近世乃初の復「デカルト」に由て復興させ後「ロック」の攻撃「ライフニツ」の答辨を逢ふて更に明白とせよ「カント」に至て又一新面目を開けり其間固より淺陋なる先天論に乏しからず又今日に於ても之なだを保せず然れども余は先天知識論乃本色の前に述べたるもの外より信す是故に「ロック」が嘗ておせる如た攻撃は今日に於て己に根據なきものと云はざるべからず論者動もそれと曰く小兒野蠻人等ハ先天知識を有せずと然れども既ハ先天知識といハ Ready-made knowledge にあらざる上ハ小兒野蠻人等之を有せざること勿論なり又或ハ先天知識と稱するものも明白ハ又直接ハ知る能はず之を知るハ他の抽象的知識と異なることなしと云ふ人あれども己に先天の Ready-made knowledge あり又之を知覺する特種の一能力をければ其之を知るハ當て直接ハ徹見する能はず精密なる抽象力を要すること毫も恠しむに足るべき者なし余ハ所謂先天知識とハ經驗の外の根原より來り「logical」に經驗の先とあり之ハ基礎とある者あり斯レ如き知識を見出するは當に小兒野蠻人のみならず通常教育ある人もなす能ハざる所あり又神不死等レ考ハ野蠻人になしなと云ふ人あるも余の所謂先天知識とは Principles of knowing あり斯レ如き Matter of knowing を以てにあらず (未完)

## 道德と經濟

島村 他 三 郎

社會ハ活物あり、いかに進歩發達せざらんや、而も其進歩發達と如何して行とる、か、はた又其原動力は如何なるものなりや。

社會をして發達進歩せまむるハ智と徳との二大原動力外ならず、智力と發動的動力あり、突進尋求の力なり、徳義ハ受動的靜力なり、制裁矯正の力なり、此二力時に衝突し、拮抗し、反撃し、時は和合し、解融し、以て着々社會をして進歩發達せしむ、請ふ少しく社會進歩發達の跡に就て之をみんら。

讀者試に思を鴻荒の世にとせよ、鬱々たる樹林はかの丘にしげり、澗水潺湲としてこの谷に流る、菓實森々充ち、魚介清流は躍る、土地廣ふして人少く、飢ふれば樹林に菓實を採り、川澤に魚貝を漁る、飽けば蒼天の下綠草の上に眠る、此時ハ當りてや人智蒙昧、もとより己レ何たるぞ知らず、隨て自己の勢力を悟らず、言語あらざれば他と交際するなく、財産あふざれば貧富階級は區別なし、唯自然に導かれ、自然に教へざる、無爲悠々、未だ智力徳力乃發動するなし、經濟界もとよりおほらざる、既にして智力漸く發動し、自然に依頼するの念漸く減じ、はては他と對する侵略となす、防禦とあり、隨て、家屋を築造し、少許の食物を貯ふるに至り、幾分の經濟思想も亦隨て發動し來ると雖も、もとより月下の螢光、論ずるの價値を有せず、且徳義力も亦僅ハ強者優者に對する弱者劣者の畏敬上に於て、少くあつたれに過ぎざるのみ。

人智漸く開發し、又舊の如くならず、言語や、一定して、人類の交際亦漸く繁に、強者弱者を制し、優者劣者を壓し、階級制度實に其端を此時代に發したり、水草を追て轉移し、牧畜を業とし、一進再進、簡易なる農業を營み、遂に部落と組成するに至る、生活や、繁雜なり、此時ハ當りてや、詐僞陰謀等其他種々ハ惡徳盛行はれ、智徳兩力の衝突、少しく始まるに至れり。

社會豈此如き情態にしてやむものならんや、益進歩發達し、簡單なる物品の製造漸くおこり、貯蓄心亦や、發達去、高尚ある道徳上の思想、人心に影響し、人智の開發、舊觀をどめず、既に於て智力大に發展去、徳義心も亦大に盛に、智徳の權衡其宜を得、相調和平均し、經濟社會の情況亦頗る其面目を一新し、豫見の思想頗る強く、簡易なる生産、分配等大興と、徳力少しく經濟上は影響を及ぼさず至れど。

社會の大勢は大陽は東天に昇るが如く、駸々として發達す、智力徳力大に増進去、工業商業盛に興り、社會貧富の懸隔大に増し、生産、分配、流通、交換、消費等諸種は經濟的要件の嚴として備り、遂に現今は經濟社會を作るに至れど。

以上述ぶるが如く、社會進歩は道途に於て、智と徳との勢力偉大あると同時に、經濟界も亦大に智徳兩方に支配せられたるは、亦疑ぬべからざるの事實也、殊に第十九世紀は經濟界に於て、特に經濟の自由、道徳、國家に對する關係なる三個の特性忽焉としてあらはれしより、遂に道徳と經濟とは離るべからざるの關係を有するに至りし也、然るに前世紀の經濟學者、尙且つ此二の關係につき、少しも着目するおかりしと、豈ややむべからざるの至らざるや、既に吾人は社會は進歩に供ふ處の經濟界は發達成立を説述せしを以て、百尺竿頭更に一步とすべし、進んで經濟道徳の關係は就て評論するの、蓋正當の順序なるべし。

夫經濟界は原動力、個人的慾望、公其的觀念、及慈惠心の三に外ならず、然らば則ち道徳の經濟界に少なからざる關係を有するものと、固より言をまざる也、然り、道徳を經濟界における絶對的要

件にして、道義の觀念なくんば、有形的能力も決して有益なる作用をなさない也、見よ、この生産上欠くべからざる労働者の一團を、彼等が實に經濟界に於ける生産力に供給者なり、彼等にして若くは不忍耐に、怠惰に、不正直ならん、其結果はたして如何、國家は生産力を減ぜん、物品の粗製濫造に陥らん、而て實に少からざる害毒を經濟界に及ぼすや火を見るときも明なり、之を反し、彼等にして忍耐に、勤勉に、忠實ならんか、生産する所は物品の善良精巧なるべく、需要増加し、國家の生産力をますると實に渾大なるべきなり、又見よ、世の守銭奴と稱せらるる輩を、彼等は唯々利己心よりなされて、より多く金錢を貯蓄せんことをのみ希ひ、他の如何を顧みざる也、彼等の富を得るを以て人生最終の目的となせるなり、否、彼等が富に得べ欲することなく得ざるを思ふこと成就し得ざるなまと思ふるなり、彼等は財産の効力の可及的高尚ある生活をなさず、幸福を得せしむるよあることを知らざる也、否、彼等は富を得るは唯に經濟界に於ける中間の目的にして、終局の大目的は高尚ある生活をなすに在ることと忘却せるもの也、故に彼等は徒に貨幣を貯蓄して、物價に變動を及ぼさ、金融の澁滞を來さしむ、而て其原因は彼等守銭奴が利己心に之に、道義的觀念は乏しければ致す所外ならず、又國民が奢侈贅澤虚飾を事とし、不必要の物品を購求するが如き、不道徳は所業も、亦之國家有益の資本を不生産的浪費に用ゆるも、甚しき害毒を社會に及ぼすもの也、彼の精酒の如き、實に害あるも益なく、人を邪惡に導き、社會を毒する假偽の物品あり、而て世人乃之を嗜むこと甚しく、佛國の如き、毎年之が爲に盡す所は金額八千萬圓に達し、英國の如きは一億圓の巨額に上ると云ふ、其他煙草の如き、佛の之が爲に費す處七千二百萬圓、支那人が阿

片煙草も費す所、亦八千萬圓をこゆと云ふ、嗚呼徒お不生産的物品、殊に社會は害毒をのこす所の物品に爲り、各國が費す所乃巨萬の財を以て、有益なる事業の資本を投ずるあらば、蓋世を益すること果して如何ぞや、而て以上述べたるが如き奢浪費の假偽的欠乏を充す處の費額を減少し、かくの如く弊風を除かんとするに、勢又社會德義に制裁によらざるを得ず、こゝよ於てか知る道德と經濟上と大なる關係を有すること。

其他貨幣に代用する處の手形と云ひ、爲替と云ひ、或は銀行の如き、商工業組合れ如き、皆之信用を基くもの、而も其信用ハ各人が德義に厚薄にとるおあらずや、組合お於ける會員相互の友愛ハ生産上に少からざる關係を有するが如き、勉強は正當に分配を得るが如し、約束を守るハ信用を得るの基たるが如き、節制は時間の徒費をさり、資本を實用せしむるが如き、もろく經濟社會にかゝる事情は、皆關係を道德に有せざるハなま、豈んや道德上の善良と、經濟上ハ有用とは、全く其揆を一に、善を行へば其結果利益を得、不善を行へば、禍害を受るあるに於てをや、經濟ハ實踐的の道德あり、この言殊に其味あるを覺ゆる也。

吾人今正お筆を擱せんとするものぞみ、我國現時經濟社會の情況よつきて、少く感慨なくんばあらず、希くは其一端を吐露するを得んか。

朱殿玉樓の裡、桂をさき、玉を炊ぐと、社會何れの人士ぞや、月くらく、破窓をてふし、爐火凍然、夢寒山萬里をハするハ、社會何れの情態なるぞや、嗚呼人生憐むべきもの、何ぞ一二にしてとゞまらん、而も最も憐むべきハ、貧民に情態にあらずや、身ハ地下千尺の暗黒洞裡、天日の明あるを知らず

とて替々たるハ彼等おあらずや、熱火炎々としてもゆるの邊、鼻目焦爛、孜孜として勞働するも亦彼等にあらずや、而も得る所僅に一家を糊するに過ぎず、其結果唯お上流人士が利益に歸し、徒に富者の財産勢力を甚大ならしむるを思はば、一片道義の心あるもの、誰か一擲同情の涙なからんや、夫涙なかるべからず、而も事之に反し、徒に虐用苦使、之急に、彼等が苦營慘憺たる悲境を救ふの心なくんば、貧民たる者憤慨の熱情炎々として燃ぜざらんと欲するも得んや、嗚呼、彼等にして激す、即ち自暴自棄れみ、宜なり、西歐下等社會貧民が胸中に鬱結せる滿腔の不平は、凝て社會主義となり、共產主義となり、日々に其破壊的暴動と逞ふること。

語をよす、日東經濟の士、西歐社會黨が暴動を對岸の火災視する勿れ、人文に開進ハ我國經濟社會の發達を促せしと雖も、其結果貧富の懸隔を以て日に甚大ならしめつゝあるを見ずや、新器械の發明と分業の整備とは日々に我國勞働者を貧窮の渦中に沈淪せしめつゝあるを知らずや、我國經濟界をして今日の如き有様を以て、進歩するものこそよ、豈其前途、思ひ見るだに、寒心すべきの至ならずや、嗚呼之を救濟するの策遂に如何、唯それ社會の道義心を厚ふせよ、上流社會富豪紳士の道義心を淳ふせよ、吾人ハ將に萌さんとしつゝある社會主義は妄想を打破すると、一に彼輩の道義心に之よるを見るなり、もし彼等よして尙漫然としてなすなくんば、社會主義の暗流に遂に全社會に彌漫し、滔々一瀉千里れ勢を以て、慘憺なる悲劇を演ずるお至るや明なり、豈それおそれ恐れざるべけんや。

聞く頃者英國「カンタルバリー」寺院の「フアラアル」氏、十九世紀末經濟界の趨勢よつきて、次の如



く論せしこと、のぶる所大に吾人か意を得るものあり、則ち記して以て予が論を補ふの資に供すと云爾。

十九世紀末は經濟界に於て殊に悲むべき顯象は、

- (一) 富豪の増加すると共に一般人民の貧困慘状益々盛ならんする事。
- (二) 大市は法外なる膨脹——従て古來の村落生活は次第に都市生活に苦戦し移らんとする事。

(三) 非常なる人口の増加より任事の欠乏、饑饉の増加及之等に伴ふ無數の弊害。

(四) 而て以上の諸弊害を救済すべき相當の慈善事業の欠乏。

(五) 民主主義の發達の勢を增長せしめ、社會黨の要求、日々激烈を加ふる事。

(六) 唯一の望なる信仰心の衰頹。

にして之を救ふる道は「ラウウエル」氏が「我々を醫する物も暴風にあらざ、旋風にあらざ、王政にあらざ、貴族的政治にあらず、民政にあらざ、唯人類が良心の靈妙なる力によりて、我々を廣濶なる人情に進ましむる所の、少き聲にあらはさるべし」と言ひしが如く、實に現在及未來に於ける經濟界の改良は、畢竟個人が良心の力によるの外なき也(未完)

### 厭世と樂天

春秋原在文

シヨペンハウエル氏曰く、人乃意思漸次は暢發して、世界は事實に通曉するや、自ら二箇の見を發

するに至る、一は斯世界を以て善良なる世となすの見にして、一は斯世界を以て害悪なりと爲すの見なり、斯世界を以て善良なりと爲す時は、其意思するや永く生活すると願ふの念とあり、斯世界を以て善良なりとなす時は、其意思するや復生活するを願はざるの念となると、然るに即ち厭世樂天の問題を論ぜんとせば、先づ斯世界の善惡を論ぜざるべからざるか、而もこれ遂に決すべき問題にあらざるあり

等しくこそ鐘なり、祇園精舎の夕まぐれに、諸行無常の響ありと聞く人あらんも、亦たぬくの別路に、あけぬればくるものとは知りながらと、かこほものもやあらん、人之實に境界に従て意思を異にす、諸行無常の響ありと云ぬも乃是なるの、晨の早く夕とあらざるをうこつも非あるや、あらず、鐘聲ハ鐘聲たらまぐれのみ、憂しと思ひ樂しと思ふ唯聽く人の心の儘あらんのみ、人の世も處を亦然り、若し斯世界を以て善良なりと云ひ害悪なりと云ふ、唯論者の境界に於て之と云ぬれみ、宇宙の本體ハ善惡を離れて存せ、強て善と斷じ惡と判ずるは、猶鐘聲を憂たもろと云ひ、樂まきものと云ふと一般なるのみ、廬山の一角縦に看て峰とみし、横に看て巒となさば、廬山の眞面目と縦に見て峰となし、横に看て巒とみすの間にあらん、若し必ず峰と云ひ巒と云ふ者あらば、之れ境界に固執するの妄言のみ

斯世界の善惡にして終に決すべからざるもれを先ば、厭世樂天の問題ハ到底之を論ずる能はざるか、夫れ然り豈ふ夫れ然らんや、厭世と愛好とは唯苦痛と快樂とを享受するに生ずるもれにして、必ずしも善惡に關するものにあらざ、何となれば物の善惡も畢竟不可知的事にして、所謂觀

念あるもろは、必ずしも善惡は解釋を待て後生するものにあふざればあり、然らば即ち世は厭惡すべきか、將に愛好すべきかは、唯一に苦痛と快樂は多少によつて之を定むべしなり、嗚呼世は果して其孰れをか多しとする

何者のこれを快樂と云ひ、何者かこれを苦痛と云ふ、曰く意れ之く所已が欲するまゝにして能力を伸すの、おれ何人も愉快とする所おして、蹉跎踈躓して事々素志に齟齬する、これ何人も苦痛とする所あるべし、所謂自由はこれ人だ好む所なきて、束縛はこれ人の惡む所あり、我に自由を與へよ、否ふざれば我お死を與へよと、死生固大と雖も自由の前にと亦何かあふん、萬骨爲に枯れ流血杵を漂すのま、以て自由を買ひし跡、欺くべからざるものあり、而も所謂自由あるもれば遂に之を完ふる事を得べきか、苟も人にして定る事を知らぬべし、若も果して然らざるもればならしめば、何れ時か能く自由を完くするを得べし、自由これを完くする能はざるまめば、世は業お苦痛の巷のみ人生るれば意思なるべからず、意思おれば願欲なかるべからず、人々實に無數に願欲を有せんか、而も其最大願欲とする處は果きて何ものぞ、或るものハ曲眉豐頰の前に媚び後に戯るあるを願ひ、或ものは耳目の好む所心思の之く所に逸樂を恣にせんと望む、或は鉅萬の金を積んで倚頓は富を誇らんと云ひ、或は赫々の名聲を遺して後昆を照さんと云ふ、而も此等の士能く其願望をば遂げ得るとするか、あらず、滔々たる天下は實に此等徒輩の喧囂狂奔に外なざるも、能く何人が其素志を貫通を得ん、よし幾分か之を貫通し得るとするも、彼等は亦他お願欲なきを得るか、苟も他に願欲ありとすれば、世は依然とむて虧缺の天地のみ

夫れ人生の一の羈絆のみ、人生るれば直に因果法の密網お落つ、纏々繞々破らんとして破る能はず、よし意欲の如何に熾なるありと知るも、も奮發の如何に烈きありとするも、運命を決して願ふがまよまに人の望を充たさざるあり、天下意の如くなるざるもれば十に八九、豈お雷に双陸の骰と鴨河の水ならんや、望月の缺々たる事いなきと云ふ、畢竟痴人の説夢のみ、仮令一二僥倖お輩ありて、意思の儘なりとするも、死の手は猶豫なく彼を安樂の中より抜して、暗黒乃内お投するまわぶずや、世にして無常なる套言の外お出づるもればにあらざるよりは、頼みなき浮世は何事の苦痛ならざるべき

人一度思を死の問題に至せば、天地は寂寞として百事悲惨の間に沈むべし、敢て富と云ふ勿れ、敢て名と云ふ勿れ、況んや漁色逸樂とや、人生の希望よく心の儘あるも、一度之の死に遭遇せば何者か亦苦痛たるを免れ得べし、思へば無常速迅の世の中、飽くかされ欲も追はれて、焦心勞思する豈に痴たらずとせんや、噫三百は骨骸灰となつて飛び、五尺の形軀煙と化して散する時、百萬は黄金遂に何の用ゆる所ぞ、墓墳犁おれて田となり、松柏摧けて薪とある時、赫々の名聲亦何の榮とする所ぞ、鶴髮亂れ易くして蛾眉保ち難く、老乃年波かへすすべき世の中とせば、漁色逸樂も轉瞬のみ、富貴利達も刹那のみ、希望の幻影を追て展轉反側する、猶氷柱を彩るの愚と一般なるんのみ、是を總ぶるお人生は畢竟苦痛の結晶のみ、希望一步を進むれば願欲從て増し、限あるの神智を限なきの希望に役し、轉に苦痛を切なきまむ、中村は百姓、一躍きて天下の關白とあり、意氣跌宕八荒を併吞せまも、區々たる明地の征略、其智を彈じ慮を竭せしも、尙心のまゝならぬを嘆き、切齒扼腕叫

賦嗟訝して、僅に難波の事と夢の亦夢と云ひまにわらずや、位九五の尊と履み、二世豊富の蓄積を  
竭して、豪侈驕奢、人生の果報を盡せし漢武も、秋風起て白雲の飛ぶを見れば、尙歡樂極て哀情多  
け嘆を免れず、風雲際會、志を上游に還ふするも、苦痛皆斯の如き、况んや居り難され下流に居て、  
あつぬ非望を懐くものに於てをや、人生何のきはか亦苦痛なかるべき、誠は長明の述べよん如  
く、勢あるものは貪欲ふのく、ひとり身あるもの輕しめたる、實はれはおそれ多く、貧乏ればか  
げき切あり、人をさのめば身他のやほことあり、人をさくめば心恩愛につらなる、世にいたるへ  
ば身くるま、またしたかどねば狂へるま似たり、いづれのところと占め、いかなるわざをあしてか、  
しばしも此身を宿し、さまゆふも心をなくさむべき

シヨペンハウエル氏と世界皆惡説を抱ける人あり、其言よ云ふ、凡そ吾人の力を出して爲す有る事  
ハ皆需求とる所有るが爲なり、故に其需むる所未だ獲ざる時は、苦痛の感を免れず、然るは需求の  
類ハ一度獲る時は、其快樂亦隨つて消散し、更にも亦需求とる所あり、是の如くよまて輾轉して已む  
こと無く、以て生涯を爲す者なり、是故に願欲する所有るものと、實は苦痛とる所有るに外ならず、  
而して生活することを欲するハ、亦意欲なるを以て、凡そ生活する者は皆苦痛を免る能はず、是に  
由りて之を觀れば、吾人の一生ハ生活するが爲み、日夜孜孜として尅争するハ外ならず、而も其末  
や一敗地に塗れて、終に死滅に歸するれみ、是に知る人生ハ猶永久乃狩獵おして、或は獵者となり、  
或は獵獸となり、争ふ所ハ極めて醜穢ある一塊肉に過ぎずと、意欲と因より苦痛にあふざるも、意  
欲の苦痛を伴ふと免を難きの數とせば、氏の言仮令極端に謗はるも、豈に多少の眞理おしとせん

や、嗚呼人類の一生ハ不幸にも、氏の切言を離る、能はざる、是非な次第と云へば云危、亦哀むべ  
きの限りよあらずや

世の眞相にして斯の如死ものとせば、果して之を喜ぶべしとするか、將之を厭ふべしとするか常  
々願欲し、常々苦痛し、常々鬭争し、終に死滅に歸す、人世の厭ふべき固より言を待たずして明な  
り、世にして既に厭惡すべ死ものさまめば、人の世ハ處す果して如何にすべき、厭離すべ死れ穢  
土は息するの用あり、須らく七首一閃、浮世の塵根を截斷して、滿身の汚血を彼爛々たる星斗に噴  
かんか、將ハ世俗の紛紜を脱却して、山深く水清きの境に優々自適せんか、抑も亦他に無上の方便  
ありて、能く世の苦痛を轉じて快樂とあすの道あるか

昔長明、行く川れ流きに人世のはかなさを觀じ、一生の榮華を空しく大原山の雲にかへて、末葉の  
やどりに天地を方丈に内ふ限りも、尙窓の月に古人をまのび、猿の聲袖をうるほすの悲みさぬ  
す、山鳥のやろくと鳴くみつけ、浮世の夢ハ襲はさくも幾度ぞ、實と思ひ入る山は奥も鹿鳴け  
ば、世ハ遷るべき道ぞなき、世を捨て山に入る人山よても、なほ憂き時は何地行らん、身存すれば  
思あり、思あれば悲あり、既に身を存せば何の處か果して火宅ならざるべき (未完)



雜錄

無品親王服色考

高橋富兄

親					王				
無品	四品	三品	二品	一品	無品	四品	三品	二品	一品
深紫					紫				
深紫					紫				

諸							王									
一	二	三	四	五	孫王	孫	諸王	孫王	孫	諸王	孫王	孫	諸王	孫王	孫	諸王
位	位	位	位	位	位	位	位	位	位	位	位	位	位	位	位	位
深紫							淺紫									
深紫							緋									

諸										臣									
一	二	三	四	五	六	七	八	初	無	一	二	三	四	五	六	七	八	初	無
位	位	位	位	位	位	位	位	位	位	位	位	位	位	位	位	位	位	位	位
深紫					淺紫					深緋					深緋				
深紫					淺紫					深緋					深緋				

家人	奴婢
----	----

椽、墨衣

有品有位は令よる。無品無位は彈正式よる。

衣服令に云、親王、禮服、一品、禮服冠、(四品以上每品各有別制)、深紫衣、牙笏、白袴、條帶、深綠紗褶、錦襪、烏皮舄、佩、綬玉珮。

こゝより一品云々ありて二品三品四品と分ていひざれども、冠の下に四品以上各別制ありとこ

とハるよりて、衣以下と別制なく共お同じと知られたり、只冠のみ品毎別制あるなど。諸王禮服謂五世王不入此限、令内通一位禮服冠五位以上每三位及階深紫衣、牙笏、白袴、條帶、深綠紗褶、錦襪、烏皮舄、二位以下五位以上、並淺紫衣、以外皆同一位服五位以上佩、綬、三位以上加玉珮、諸臣准此。諸臣禮服、一位禮服冠、深紫衣、牙笏、白袴、條帶、深縹紗褶、錦襪、烏皮舄、三位以上淺紫衣、四位深縹衣、以外並同一位服、大祀大嘗元日則服之。

親				王			
無品	四品	三品	二品	一品	無品	四品	三品
別制	別制	別制	別制	別制	別制	別制	別制
深紫				深紫			
牙				牙			
白				白			
條				條			
深綠				深綠			
錦				錦			
烏皮				烏皮			
綬玉珮				綬玉珮			

諸		王	
一位	別制	一位	別制
二位	別制	二位	別制
三位	別制	三位	別制
四位	別制	四位	別制
五位	別制	五位	別制
深紫		淺紫	
牙		牙	
白		白	
條		條	
深綠		深綠	
錦		錦	
烏皮		烏皮	
綬玉珮		綬	

諸		臣	
一位	別制	一位	別制
二位	別制	二位	別制
三位	別制	三位	別制
四位	別制	四位	別制
五位	別制	五位	別制
深紫		淺紫	
牙		牙	
白		白	
條		條	
深縹		深縹	
錦		錦	
烏皮		烏皮	
○		○	

朝服。一品以下五位以上、並皂羅頭巾、衣服同禮服、牙笏、白袴、金銀裝腰帶、白襪、烏皮履。六位深綠衣、七位淺綠衣、八位深縹衣、初位淺縹衣、並皂縵頭巾、謂縵無、木笏、謂職、  
レ文縵也。烏油腰帶、白袴、白襪、烏皮履、袋從服色、親王綠緋緒、謂以綠緋二色相雜而爲緒也。一品四結、二品三結、三品一結、四品一結、諸王三位以上

同諸臣、謂三位上者、一位以下也、同諸臣、  
者下文、正位紫緒、一位三結等、  
謂下文上階二結、下階一結、是也。其初位者、以三大  
小爲正從、即大初位上、少初位上、二結之類也。諸臣正位紫緒、從位綠緒、上階二結、下階一結、唯一位三結、二位二結、三位一結、以緒別正從、以結明上下、朝廷公事則服之。

親		王	
一品	皂羅	一品	皂羅
二品	深紫	二品	深紫
三品	牙	三品	牙
四品	白	四品	白
	金銀裝		金銀裝
	白		白
	烏皮		烏皮
	綠緋		綠緋
	四結		四結
	三結		三結
	二結		二結
	一結		一結

諸		親	
正一位	深紫	正一位	深紫
從一位	深紫	從一位	深紫
正二位		正二位	
從二位		從二位	
正三位		正三位	
從三位		從三位	
紫三結		紫三結	
綠三結		綠三結	
紫二結		紫二結	
綠二結		綠二結	
紫一結		紫一結	
綠一結		綠一結	

延喜式云諸王二位以下五位以上者中紫。

從三位	正四位上	正四位下	從四位上	從四位下	正五位上	正五位下	從五位上	從五位下	正六位上	正六位下	從六位上	從六位下	正七位上		
皂羅															
牙															
白															
金銀裝															
白															
烏皮															
紫	綠	紫	綠	紫	綠	紫	綠	紫	綠	紫	綠	紫	綠	紫	
一結	二結	一結	二結	一結	二結	一結	二結	一結	二結	一結	二結	一結	二結	一結	
深綠				淺緋				深緋							

諸

正三位	從二位	正二位	從一位	正一位
頭巾				
笏				
袴				
腰帶				
襪				
履				
紫	綠	紫	綠	紫
袋緒				
淺紫		深紫		
衣 <small>禮服ニ</small>				

延喜式云大臣帶二  
 位一者着深紫  
 諸臣三位着中紫

王

從五位下	從五位上	正五位下	正五位上	從四位下	從四位上	正四位下	正四位上
皂羅							
淺紫							
同							
同							
同							
同							
同							
深縹	淺緋	深綠	深緋	深縹	淺緋	深綠	深緋
一結	二結	一結	二結	一結	二結	一結	二結

臣										
正七位下	從七位上	從七位下	正八位上	正八位下	從八位上	從八位下	大初位上	大初位下	少初位上	少初位下
皂羅										
木 <small>(謂職事)</small>										
白										
烏油										
白										
烏皮										
綠一結	紫一結	綠一結	紫一結	綠一結	紫一結	綠一結	紫一結	綠一結	紫一結	綠一結
淺縹			深縹				淺綠			

制服

無位	家人	奴婢
頭巾	皂纓	橡、墨衣
袴	黃	
腰帶	烏油	
襪	白	
履	皮	

朝廷公事ニ即服之、尋常通得着草鞋。

選叙令云、凡蔭皇親者、親王子從四位下謂親王者不限三有品無品一皆是凡一諸王子從五位下、其五世王者從五位下謂不在諸王之限故同諸臣者緋。子降一階、庶子又降一階准別勅處分不拘此令。

蔭位

諸	王
一品	淺紫
二品	淺紫
三品	淺紫
四品	緋 <small>(皇親ニ在ズ)</small>
無品	無位者 <small>(緋)</small>

子從四位下 || 子從五位下 || 子從五位下 || 五世王從五位下

子 正六位上

庶子正六位下

令よてハ無品親王ハ服色明かならざる小似たれども深紫なると疑ふ、何となれば無品親王にても、子ハ蔭位にて從四位下に叙給ふる、即諸王五位以上よて淺紫を服す、蔭子も淺紫を服す

るは父親王の黄袍を服すべき理あらんや、さればこそ延喜彈正式にハ紫とは記されたりとるをこの式文をよみひがめたる説れ見ゆるはいともノけしかるとなり。委しく下に云ふ可し。

彈正式云、凡無品親王諸王内親王女王等衣服色、親王着紫以下、孫王准五位、諸王准六位、其服色者用<sup>レ</sup>織<sup>〇</sup>

この條も無品の親王内親王無位諸王女王の服色を云るにて、無品の字に無位を兼たり、すべて此ケ條は始終無位<sup>〇</sup>の事を云るふて有品にはとたらざるなり

無品親王黄衣を着すと云ふこと、西宮記に始めて見えて黒川真頼主の説も左の如く見わたる

皇太子

衣黄丹

新制

舊制

親王

一品  
二品  
三品  
四品  
無品

衣黄<sup>淺黄</sup><sub>也</sub>

衣紫

一品  
二品  
三品  
四品

深紫

諸王

正一位  
從一位  
正二位  
從二位  
正三位  
從三位  
正四位<sup>下上</sup>  
從四位<sup>下上</sup>  
正五位<sup>下上</sup>  
從五位<sup>下上</sup>  
正六位<sup>下上</sup>  
無位孫王  
無位諸王

衣紫

衣<sup>纁</sup>

衣黄<sup>淺黄</sup><sub>也</sub>

一位—深紫

二位—中紫

三位—中紫

四位—中紫

五位—中紫

六位—纁

孫王—淺緋

諸王—纁



諸		臣	
正一位	衣紫	正一位	衣紫
從一位	衣紫	從一位	衣紫
正二位	衣紫	正二位	衣紫
從二位	衣紫	從二位	衣紫
正三位	衣紫	正三位	衣紫
從三位	衣紫	從三位	衣紫
正四位	衣紫	正四位	衣紫
從四位	衣紫	從四位	衣紫
正五位	衣深緋	正五位	衣深緋
從五位	衣深緋	從五位	衣深緋
正六位	衣深綠	正六位	衣深綠
從六位	衣深綠	從六位	衣深綠
正七位	衣深綠	正七位	衣深綠
從七位	衣深綠	從七位	衣深綠
正八位	衣深縹	正八位	衣深縹
從八位	衣深縹	從八位	衣深縹
大初位	衣深縹	大初位	衣深縹
少初位	衣黃 <small>淺黃也</small>	少初位	衣黃 <small>淺黃也</small>
無位	無位—黃	無位	無位—黃

一位大臣—深紫

二位—中紫

三位—中紫

四位—深緋

五位—淺緋

六位—深綠

七位—深綠

八位—深縹

初位—深縹

無位—黃

西宮記(左大臣高明公)臨時八云、黃衣無品親王孫王綾源氏及良家子孫弱冠者着之。公卿子孫侯殿上無官時用黃衣。

これハ何時の頃より此の如くよなるとたるハか詳あらねども、大凡村上天皇の初年あるべし又云、無品親王無位孫王諸王の黃衣ハ村上天皇より以來乃制ならん以上黒川説 (未完)

レオバアデイ

B.

T.

(其人及び其想)

西歐の文學を究めんとする者は、必ず一度は以太利文學ハ指を染めざる可らず、而して以太利文學を究めんとすれば、勢ひ必ず非凡ハ天才「デアコモ、レオバアデイ」ハ遭遇す可し、西歐に在りては其名聲噴々として傳され共、我邦ハ於てハ未だ深く稱せられず、或ハ名を知るも其文學を窺ハず、或ハ一二の斷片を窺ふも未だ其性行を審らざるもせざるもれあり、仍て聊カ其略傳を叙し、併せて其思想の一斑を紹介せん

「レオバアデイ」其名を「デアコモ」と云ひ、千七百九十八年六月二十九日「レカナチ」と稱する小邑に生る、伯爵「モナルド、レオバアデイ」の長子よきて、母ハ「アデレエド」と云ひ「アンティチ」の貴族の女なり、去れ共父の伯爵之家計窮乏を告げ、貴族ハ女を娶りても、少しも救療する所あらざれば、「レオバアデイ」ハ幼時より一方ならぬ窮厄れ中に育てられぬ、父乃伯爵は稍古風ある學問を有し、邪路ががらも聊カ文學趣味を解き、人となりハ偏狹よして癩癩あり、加ふるに憂鬱の性を帶

び、貧苦に迫まられ、己むを得ず非常に節儉を爲し、母は亦た頗る痛癢ありて、人に對して同情を有せざる人ありき、兩親共其子の天才を認めず、幼年の折屢責檻を加へ、他日「デアコモ」は名聲世に籍々たるに及び、父のみは稍愛情を回復したりと雖も、要するに一生の間の洋々たる和樂を缺たりき

「レオバアディ」幼時と、村の僧「ヂュセップ、トルレス」、及び「セバスタアノ、サンキニ」の二人の教育を受け、前者には九歳に頃まで、後者にて十四歳の頃まで、就て學び、重も羅典語と哲學の初歩とを勉強したり、當時以太利の學術界に徴するも、斯等の兩僧は、此神童の多量に智識を興へ得ざりし、明瞭なることとして、渠は夙に教師に卓越し、十四歳の頃よりは師に就かず、父の家在りて古典と修めぬ、渠の初めより最も熱心な究めんことせしむ、希臘語あるも、當時以太利に於ては、希臘語の研究は全く荒廢に歸し、更に就て學ぶ可人の人を得ず、茲に於て渠は非常の熱心と勉強とを以て、獨力其講修に従事し、信ず可ざる程に短日月の間、既に重なる古人の傑作を讀了し、能く之を自己の思想内消化したりとは、實に驚く可きものにして、之と其著作に徴するに非ざんば、殆んど信し得難に程なり、渠を傳せる「ラニエリ」の言に依れば、渠は丁年未滿をえて、既に自國のミナコ、英佛獨の諸碩學より、文學の秀才として承認せられり、又た英、佛、獨、西、四箇國の語を精通し、自由に之を使用し、且つ「ヘブリウ」語にて猶太教の「ラビ」(僧官)と談論するを得りとも、皆な二十歳未滿の頃なりしとぞ、豈に驚嘆すべきものに非ずや

千八百十四年渠十六歳の頃、「ポルフエリ」が「プロチヌス」傳を校正し、其註釋と著ししめ、鴻鑑「サント、ブウブ」は曰く、終生「プロチヌス」を專攻する人と雖も、此少年の作中より新鮮わいて裨益ある智識を見出すを得べしと、以て其價值を知る可し、其翌年「古人の誤」と題せる書を著ししが、是の渠れ一代の傑作れ一かりとす、一千八百十七年に、「アナクレオン」の体は倣ふて、希臘語の短歌二首を賦す、當時の大家「ヤオルダニ」之を見て、大に嘆稱し、「アナクレオン」自身と雖も、之を自己の作と區別するを得ざる可しと云へり、其年亦「オヂュセイ」「アイナイド」の幾部分、及び「クセノフォン」「インクラテス」「エビクテトス」等諸名著を、羅典語に翻譯しり、此他創作及び古典の釋義類を著はせると頗る多く、一々列擧するの煩は堪へざる者あり、而して初めは多く詩歌を賦せず、稍注目すべきもの、千八百十七年お顯はれたれ共、多くは千八百二十四年以後と爲す、哲學的研究に至りては尙ほ其後に屬す

非常の勤勞と、大に渠の身体を傷害したり、生來至て蒲柳の質なりしが、十七歳の頃にと健康全く破れ、遂に終生望か死病人となりぬ、且つ視力大に衰へ、千八百十九年に、長らく書を讀み筆を取ると能はざりき、折々の痛苦劇しくなりて、鬱結憂愁の境に陥りぬ、渠自ら嘆じて曰く、頑固なる無慈悲なる恐怖すべき憂鬱は、予を消磨し予を食ふ、而しては勉學によりて招きし所あるも、今勉學を止めなば尙ほ甚しく増進し來らんと、憐れなる哉「レオバアディ」善病の身を以て僻邑に索居し、只僅りに弟妹と伍して、聊か慰藉するのを、廣く世に出て、汎く俊豪と臂を取て遊ばんと希望せざも、兩親は頑として其請を容れず、依然「レカナチ」を執伏せり

流石に「レオバアディ」も遂に堪へずやあせけん、窃りに意を決して、「レカナチ」を逃れ去らんと欲

し、「マセラタ」の知事、プロオリヨ「伯」書を送り、旅行免狀を求めたぞ、「プロオリヨ」伯は是れ必  
 ず父の許諾を得たるものなふんと信じ、該免狀をバ一封の書と共に、之を「レオバアディ」の父に送  
 致せしむべ、計畫盡く破れたり、失望小失望を重ねる「レオバアディ」の、今は書を讀み文を屬し想  
 を練るの力もなく、寂然として一室に閉居し、唯時計の音のミを聞て暮し居りたり  
 其内次第に稍、心の平靜を回復し、一千八百二十二年十一月に至り、父も遂に羅馬へ行くとを容る  
 せり、蓋し羅馬へ行かば、定めて僧職に入るを念を起さんかとしての事なりき、「レオバアディ」羅馬  
 に趣きて見るに、嘗て「レカナチ」に在て、夢想努ま如きものふはあらず、詰らなき俗人輩の群集せ  
 る處なりまはは大に驚きたぞ、去れ共此時「ポンチフ」の朝に駐在する普魯西の公使「ニイブウル」  
 と親しく交るを得たり、此人と學問あてて見識高く、性質温良ふて深く「レオバアディ」は才學を  
 愛し、遂に其周旋にて、伯林大學希臘哲學の教授に招聘せられたるも、「レオバアディ」は病身に  
 て、普魯西の嚴冬には堪へ難死を以て、心ならずも之を謝絶したり (未完)

『僧』列爲斯附妹毛野、

太 瑯 生

「ロックハルト」が蘇格のぢへ来るを見るにアランカンニンガムに云へるとあり、予は未だ嘗  
 て『僧』の爲小其寓て共食せんと請はれま時ほど得意なりし事のかりりたぞ、此小説『モンク』が  
 如何に社會の心を牽きかを知る可く、爲に當時初めて入りま龍敦の社會を青年僅二十歳まで小  
 獅の名を擅せし著者の名譽想ふ可く、之を誰とかす、これなん獨乙派の不羈の體をまねびて其後

『恐ろしの物語』、『怪しの物語』の中お收められし小曲作りしマッシュリグゴリーレウイスにて一七  
 七五年に生を二八一八年に逝ぬ享年四十四歳、其蘇格と相見しは一七九八年、其二十三歳の秋に  
 て蘇格は渠は四歳の兄ありき、パイロンの言に、身材短少渠の如きは未だ見ずといへり、其『恐ろし  
 の物語』は一七九九年ケルワーに出で、次で翌る年『怪まの物語』を作りぬ、この其翌る年、龍動にて  
 其他の短篇共取纏めて二巻になりて世に出でぬ、蘇格を見て以て詩人とあし、此小冊子の爲な  
 りき。

第一人と妹二人持てり、父は西印度小夥多しき財産持ちて彼の生れし當時は兵部の次官あて、專  
 賣特許局長トーマスセエル君の住所なるアテルヤウ附近に所領ありて其末嬢フランニを娶し  
 が、フランニハ年いと若くて赤繩結びしくらに惚領子はいたくな陸死て母の名を呼び遊友達と  
 てほめちぎりしりば、後父の妻に不實なりし頃は母の味方をしていたく父と抗ひぬ、其母と唯  
 一の争は馬鹿氣ま事ながマッシュグレゴリーと名附けしとなりき、其争は、母御よ、名、私様なこ  
 んな名、嫌お恐いこんな名かと六ッくれば、いとまの者よ、何故其様にいふぞ、左程六ッのまくいふ事  
 かいと慰む、去れば母御と、斯る名附けしは餘りに無残なり、かまも此名聞て何の感もな死にや、  
 氣高く情有りげの名ハ、そを呼べば自ら夫と相應しき人の、胸は裏小顯るるものぞかし、考へてモ  
 見賜へ母御よ我ニの名を、何をも醜き名ならずや、マッシュウと、グレゴリーとをされどマッシュ  
 は實に父御の名、グレゴリーはと、尙も解さわかさんとするを遮りて、母御よ自己が辨護に口さへ  
 得開かぬ幼き者を左程につらく侍らば親戚の誰彼許さぬせじ、たよりなき幼兒のマッシュウといふ名

をいやがるを許さぬ上に、お身は一言もかなくてグレゴリーといふゆゑ、じき名を加ふるとを許されしぞ怨なる、二重乃つれあさ、母御よ二重のつれなきかかると口説きぬ、さればこそ久しものらざりき、そはやがて世は復マッシュを呼んで『僧』レキスの名のみ世人の耳朵よ響きつればなり『僧』は其牛津の學志稿を起したりしが此處よと長く留りて巴黎の花に嘯きし身のいつまの此處よも辭して日耳曼の月を愛で、小曲戲官の内に遊びぬ、ゴエテに遭ひしも此時(一七九二年)あどき、父は外交の務學バせんと思ひしもれかゝ渠翌る年は國に歸りて交際官に試み補せられ公使に隨從して蘇格蘭に赴きハアグももき、其處に『僧』の稿成りて一七九五年は夏公ハたりし時年紀方に二十、人として其隣せざるハかく其を道義的の攻撃せし向も多かりしが、其天才を認めざるハなかばき、抗撃の聲高まる程に讀む人愈多く『僧』は名を名字の上に加へられき、後ヒンドンより撰ばれて議院に入りしと出席すると稀にやがて罷めぬ、パーンスへ退隱して、翌る年『城の物怪』の劇、六十夜うを通きてより種々の歌舞伎續きてつくりまた自作の小曲に合はす樂をもつくりき、此ぞ蘇格を驚かし、一代の才子が身の上あり、其著作の主なるもの

小『僧』(一七九五作)、

本『城の物怪』(一七九七作)、

『ウニスの強賊』(一八〇四作)、

『怪しの物語』(一八〇一作)、

『奇談』(一八〇八作)、

『カスチル王』

『東印度人』(一七九九年)

『アデルモーン』

『彈琴者の嬢』(シラーの「露謀」等)

今、水の中の月、鏡に裏け花、光なく香なきをも耻ぢずして拙き筆ハ其二節とらつし出でぬ、嗚呼なる業と答先玉はで、よゝ沐猴の姿いやしと戴く冠に微光をだに認め玉ハ吾幸なり、左ハ『僧』第三卷に初めて出づもの、

妹毛野 (Imogene)

兼蘇門倫楚者女妹毛野之情人、將從軍征巴列多因歸行女曾不變節、既去之後中余一日有一士人、戴金玉求昂贈女求婚、女許之、則舉婚儀、是爲此一曲之前半

ねに結びの式濟みて

後は樂しき亂れ酒

積と重ねたる海山の

めでたき物に卓も鳴り

樂しみ笑ふ客の聲

何時を果ともなき折しも

城の鐘の音數ふれば

早丑三ツを告ぐるあどき

何心なく妹毛野が

傍お坐せる夫を見て

打驚さぬ、其夫は

よも恐ろしき姿よて

幽けき音もかさゝれば

物をもいはず、身じろりず、

四邊をも見て只管に

此新婦を見詰めて死

身は丈高く假面着けて

物具黒くいと忌々々、

今まで高き笑ひ聲

談話の聲もひたとやと、

心と知らぬ小狗すら

一眼看られて逡巡り、

ともし聯ねし火影さへ

青味を帯びて物凄さ、

胸は潰れぬ人やある、  
震ひながらも新婦ハ

『わはれ賓客、宵をバ

樂まかたせ賜へる』、

聽き納れたりー武士は

わはれ其面見たる時、

假面の下より現きー

餘りの凄さ恐ーさ

面をむけぬ、武士の

匍出、匍入る蛆虫は

時に怪しむ武士云ひぬ、

剛の阿倫會忘れじな、

罰せる爲よ我たまよ

假に誓ひて妻と呼び

武士、妹毛野を搔抱々ば

後に残りて地の裂けて

再び妙なる妹毛野も、

客ハ恐れて聲吞みぬ、

語る聲さへおどろにて、

脱がせ賜ひて、妾等が

女のゝ口に口つぐみ、

徐々假面脱ぎ去りつ、

新婦の驚いばかり、

武士の面ハ觸腰など、

皆一様に呀とばかり

洞ろに立死眼は窩を

髪は外きに繞りゆく、

『見よや妹毛野、偽り者、

神は御身のいつかりを

汝が婚儀の席によせ

汝を墓穴に引けといふ』

恐を叫べる聲高く

共に黄泉へ没せしけち、

抱きてゆきし亡霊も、

此世にて見し人々なき、

如何にレキスが奇傀を弄するうを見ん』

跡ハ空しく、風老ひて』

(完)

### 武道初心集抜抄

友人伴棕湖、一小冊子を藏す、題して武道初心集と云ふ、著者ハ友山大導寺翁、上中下の三巻を合せ、載する所の初心は武士心得四十四ヶ條、其今日にありてハ不適無用讀むよ足らざるものかさにあらずと雖ごも、而るも又拍案正襟感發銘心すべきもの少なりらず、昔者封建時代に於て書寫傳説世の賞讀を博したるものなりと云ふ

武道初心集と武士道初心集あり、既よ初心集と云、故ハ高尚の理、不可思議乃説ゆるにあらず、唯其題名の武道と稱し、其内容の武士道に關するや、生平の頑心一見之を放棄するを許さず、常ハ机側に備へて時に閱覽せり、借を棕湖に請ひ得てとり正一星霜、漫惰の罪殆ど避くべからず、即ち之を返さむとするに際ま、二三ヶ條と抜抄して未だ此書を讀まざるの諸士に示さむと欲す」日夜十數ハ學課ハ齷齪たる諸士よ、諸士は如何なる時間、如何なる工夫を以て、精神的修養を勵めつゝあるや、智識は増進せむ、此に反比して人物と減少せむとハ果して信ありや、智識進歩せば人物減少するも可なりとハ、血あり涙ある者の言なりや、道義日に廢し廉耻月に薄らぐ、此れも時勢と諦めざるべからざるものなりや、物極まれバ變ず自然ハ任せよとは、國家と云ふ觀念ある人間の聲ありや

諸士よ、虚心かれ、平氣なれ、而して左に抜抄する所を讀め、讀みて平凡なりとなすの、多奇なま  
とみたり、請ふ更は熟讀せよ、翫味せよ、忠義廉節なる古武士の本領と面目と髣髴乎として夫を  
紙上へ躍出せむなり、嗚呼豈に感なきを得むや

河原義山 識

義不義

武士たらむ者と、義不義の二つをとくと心に會得仕り、専ら義を務めて、不義を戒むべきとさ  
へ覺悟仕り候へば、武士道は相立申候、義不義と申の善惡の二つにまて、義は即善、不義は即惡  
候、凡そ人として善惡義不義の辨へ乃無と申事は無之候得共、義を行ひ善に勸む事と、窮屈にして  
大儀お思はき、不義を行ひ惡をなす事と、面白く心安きを以て、ひすら不義惡事の方へれみ流れ  
て、義を行ひ善を勸む事は、いやに罷成事に候、其身一向れうつけものにて、善惡義不義の差別無之  
は論に及はず候、既し不義惡事と了簡をば仕りながら、義理を違へて不義を行ひ候は、武士の意地  
おぼくす、近頃未練の至りに候、其本ハ物に堪忍情の薄きが故とも可申候、堪忍情も薄きと申せと、  
聞よき様に候得共、其根元を尋ね候へば、臆病よりおこる事も候、去るに依て、武士は常は不義を  
慎み、義に従ふを以て肝要とは申にて候、扱義を行ふに付て、二段の様子有之候、譬へハ我近付れ  
もれと同道して、他所へ行事あるに、其つれの者百兩の金子を所持致し、是を懐中いたまゆりく  
も苦勞不候間、後刻罷歸候まで、爰許に預り置度と申候に付、其金子を預り、人の不知様は納め  
置て、其者とつれ立参りたる向に於て、件の連の者大食傷、又は卒中風などの急病と煩ひ出し、  
即時は相果候義有之時は、右金子を預りたるも預りたるも、外に知りたる者としては一人も無之候、

然るに扱も笑止なる仕合うなど、痛ましく思ふ心より外ハ毛頭も邪念なく、右預り置たる金子  
の義と、其者の親類へ申理と、早速返し遣はすは是れ真によく義を行ひ人とも可申候、次ハ右の金  
子と申は、大抵の知人までよて、左のみ入魂と申に無之も、預りたる金子の義と、外に知りたる  
者なげきは、何方より問尋ねのあるべし事にも非らず、折しも我手前も不如意なれど、幸の義を  
り、是は沙汰なしに致し置ても苦くかるまじきりと、邪念のさし出候を、扱もむさ意地出さる  
物など、我ど我心を耻しめ、急度分別を致し、件ハ金子を返すは、是を心に耻て義を行ふ  
人とも可申候、又其次は、右の金子預り置候を、妻子召使のもれ、中に於て、一人にても存したるも  
の有之に付、其者れおもくや耻、後日の沙汰を憚りて、其金を返すは、是人に耻て義を行ふ人  
とも可申候、但し如此なるは、一向に知りたる人さへ無くハ如何あるへたや、去りあうは、是も亦  
義を知て行ふ人に非らんとハ申うさく候、總して義を行ふ修行の心得と申ハ、我妻子召使を初め、  
身に親ハ輩乃下墨を第一に耻愼しみそれより廣く他人の誹り嘲りを、耻入て、不義をなさず、  
義を行ひつけ候得は、自然とそれか習と成て、後々は義に従ふことを好み、不義を行ふ事をいや  
と存する意地合に罷成候物に候、扱又武勇の道に於ても、生得の勇者と申ハ、戰場に臨み、いか程  
矢鐵砲の劇ハた場所とも何とも思はず、忠と義との二つに、其身を的になして、進み行く心  
は勇氣ハ、形にも顯ゆる故、其ふり合の美事さ、兎角申されさるもれに候、或ハ扱も危か死事  
かな、これと如何致まて善うらむと胸も轟き、膝節も顫ふといへとも、人も行るれとあを行中に、  
我獨り行すしてハ、味方の諸人の見る目もあれハ、後日よ至りて口のきられぬ所ありと、是非を

く思ひ切、勇者と相並びて通み行もれも有之、右に申す生得の勇者と並處て、遙く劣り候得共、幾度も左様の首尾は出合て、場を踏み重ね物馴候へは、後々は心も定まり、生得の勇者にもさして劣る事なれ、譽れは剛の武士ども罷成候、然れハ義を行ひ勇を勵むに付ても、兎角耻を知ると申より外に、心得とは無之候、よし人は不義とも云へ、大事なしと云て不義を行ひ、扱も腰ぬりかなと申て笑は、笑へ、大事なしと云て臆病と云らる者には、何を申教ゆへき様も無之候、初心れ武士心得れため仍如件

勇者

武士道に於て肝要と仕り候は、忠義勇の三つに止り申候、忠勤の武士、節義の武士、勇剛れ武士と申候、此忠義勇の三徳を、一人に兼備へたる武士をさして、上品の士と申候、去れと百千の武士れ中よ於て、上品れ士と申と稀あるものに候、扱忠勤の武士と、節義の武士との見分々は、常々の行跡より顯はれ、知易れ道理に候、勇者乃義は、治世の今、無事れ時代は、知れ兼可申やとの不審も有之候得共、左様は無之候、子細を申す、凡勇氣と申すものは、身に甲冑を装ひ、手に鎗薙刀を以て戰場に臨み、勝負を争ふ時節に至り、初て顯はるるにて、更々無之候、平生疊の上に於て、是は勇者、是れハ不勇者と申す見分けと、成程相知れ申ものにて候、生得の勇者と申すものと、主親へ忠孝を勵み、少よても身の暇われり、學問に心を寄せ、武藝の稽古も怠る事なく、身の奢を慎み、一錢の費をも厭ふ、扱吝くきたなれた心と見れと左はなく、致さて叶ハぬ事には、金銀と惜氣なく出し、或之主君れ御法度、或は親々の嫌ふ事とさへあれハ、何程我行度と思ふ所へも行かず、止

にくき事をも止めて、兎にも角も主親の心よ背のす、身命を全く保ちて、是非一度は大功を立むと思ふを以て、常々の養生深く、喰度物をもひるへ、飲たき物をも飲まき、人間第一の惑なる色情をも慎み遠さけ、其外萬事の上に付て、物に能く堪へ、忍ぶ意地のあるは、是皆勇者のたつかけに候、扱又不勇者と申ハ主君をも親をも、上べはより敬ふ振を致さ、信實に大切と存する意地は無之、主君れ法度、親々れいやがる事といふ慎もなく、行まじき所へも狼狽ありき、仕るまじき事も仕り、萬に氣隨を先たて、朝寢晝寢を好みて、學文をと大きき嫌ひ、武藝を勉るども、何一色取あめて稽古致と事もなま、所作も叶はぬ藝自慢の利口だてばかり申し、役にも立たぬ阿房狂ひ、又は榮耀喰ひなまはいか程も物を入れ、知行の物成切符をも、跡先の考なりに遣ひ散し、致さて叶ハぬ事ハ至て齎く、親の譲りに受けふる古具足毛切れ仕、塗の剝候を脩復致すへた心掛けさへ無之仕合なれハ、ましてや外の武具馬具れ不足を改めて、新よ支度するなどは、思ひも寄らず、其身病者よてハ、主君へ奉公も叶はず、親々の氣遣ひ苦勞にあるといふ勘辨もあく、大食大酒乃上色情に耽り、我と我壽命に鑑子を懸る如くあるは、是皆物に堪忍ふ事の成り兼ね、柔弱未練乃心より起る義をれり、是を不勇者、臆病武士のきつかけと目利して、大方外れは無之候、爰を以て勇者も、不勇者も、疊の上に於て、成程相知れ候とは申あて候、初心れ武士心得れため仍如件

擇友

奉公仕る武士は、多き傍輩の中よても、勇氣ありて、義理と正す事を好み、智慧才覺有てて口をきく

武士とて、日比入魂致し、内外心安く申合する義尤候、右様の武士は、左のみ澤山には無之もの候へば、一人にても、自余乃友達幾人にも懸合ひ、何事ぞ有之時は、大に便すと罷成物にて候、總して武士の友達を擇取事なく、彼ども是とも押れ睦ひ、飲食は交りを致し、出入を繁く仕るの宜しからず候、子細を申すに、武士は入魂を仕るは、互に心根をも見届け、見せつけられてこそ、念比には可能成と、當分出會て面白きぞ、合口なるぞと申と迄にて、心易だてを仕り、武士の出會の様に無之、不禮不作法のみを盡し、手足をもさせあひて、小歌淨瑠璃にて夜を明し、うぬがわがと挨拶よきかと思へば、假初の事を申すつりて不通義絶を致さ、誰有りて中をななす者のなきにも、頓て又中のなき候など、一つとして踏詰たる意地は無之と貌は武士にてても、心は夫人足に等しん様子にて、耻憤しむべき事候、初心の武士心得のため仍如件

交誼

武士たらむもの、頼母なき、意地有之と申すと、武道の正義候、然りといふ處とて、譯もなく頼母しだてを致さ、懸も構はぬ所へもさし出、我苦勞お成まじき事を、荷さひ取持候を、さし者共申し、又は物懸りあごとくも沙汰仕り、大きに宜しからす候、是は少し構ひても存する事などとも、人が頼まぬ事からは、まはぬ程好事は無之候、子細を申すに、小事と云ふに及はず、たどひいかほどの六ヶ敷事たり共、武士の上お於て、既頼むる頼まるる事と申すお至り候ては、我身に引懸、苦勞に不仕しては不叶候、事れ首尾によりては、主君親兄弟の爲にさ急、無差と捨ぬ一命をも、是非なく相果す儀も有まじき非ず、爰を以て譯もなき頼母しだてと、無用と申にて候、

古き武士は、人お物を頼ま候へば、成る筋、成らぬ筋を勘辨仕りて、成まじきと存する事を、最初より請負不申、可成筋の義と存する義も、篤と思案致して後、其義を受負申すに付、既受負候ほどの義は相調ひ、首尾不合の義とて、無之物にて候、去るに依て、人も埒明哉と申して、譽事にも仕るおて候、然るに其考なしに、人か物をさへ頼めば、心易く受負、首尾不合なれども、それを何共不存候時、不埒者といふ名取を仕り候、扱又人に我か思ひ寄を申さ、或は異見を加へ候も、勘辨ある處き事にて候、子細を申すに、人の親師匠、兄伯父おとれ身まで、子や弟子や、甥弟お對しては、さしひいか様の思ひ寄と申過候ても、苦しかるまじく候共、うれさ急武士は口より物を申出すは、遠慮勘辨なくして不叶候、況や友傍輩お對し候ては、猶更遠慮尤に候、扱又人より打わりて、相談を致し懸る義有之節、我等も了簡に不及と云て、一向相談を斷り候は格別の義に候、既お其相談相手と罷成より初めては、さしひ其人の心よ叶せず、氣お入らぬ事なりとも、少しも遠慮なく道理をせめて、我の存寄の一事は残りも残らず申述るは、一段頼母しに意地にて候、然るを心弱くて、个様申さざらむに、若も心に障るべきや、氣も當る處さうかと、下手遠慮を致して、事れ道理も背き、筋目にあふざる義を、尤左様にも可然かと、間に合なる相談に及び、其人に云まじき事をいへせ、或は仕形の負を取らせなど致して、後日人々の誹嘲りに逢せ候は、相談相手に頼まれたる甲斐もなき仕合に候、或は我を人がまき思ひて、相談を致すお付て、理の當る所を以て、相談も及ぶ義を不用とて、己の心任せに致し、事を仕損する様なる無分別ものおは、向後入魂仕間敷事に候、初心の武士心得のため仍如件



文苑

梅のかたを愛づる詞

香村茂一富

二月の雪どころもにおちて、袖まさき春なれば、なふかしの梅林も、すこしはやるべけれど、室咲のもなか／＼はへなからまし、せめての心やりにとて、古き書畫をもかれおれり居るに、三つにありたる稚兒の、いとわかしげなる小指もて、下よりひさいだを、なにぞ見るに、うれしやこれに梅と修りけり、誰か、死にけん、わたる片端の、しみこいふ虫にくはせつれど、そこのかとなく、霞さなびくやまの邊の、さだのさかりの梅の木蔭も、里の重か牛ひきよせて、あまをそ手折れど、鞍にひひ上る修りさま、たぐひあらず、染めなせる筆のにはひよ、あはれこの窓明けあば、鶯もひとり飛び入るべしや

墨か死のかきみをもる、梅の香に  
 えては匂ひのたちそかりつ、

春月

草野時雨

霞の月をつゝむにやあふん月のをもりて霞とみゆるにやあふんあはれ春のよれ月こそ心にくきまはみなりけれ野も山もひさすらおほろあるに遠方の村など燈火それとあくほのめくほとよさ

しいつる月影こよなきふ嶺のあふしか松風のかすかにもれくる琴のしづへよあはれぬしや誰からんとゆかし中空までさ／＼のほりたるを春の雁金の一つら月を横切りてはつかに聲もふしつる様なとけにうす墨よかきけん玉章ともみはて筆さばあら書よこそ、まほしけれさて曉といと、あほるあるよひむかしの山れたたきやう／＼よ白み行つゝあたり見わかぬまで霞渡れるにおち方の松の梢花のうれこ、かしてはほの見ゆるはあはれ斧の柄も朽たてぬへくあほゆるや

うら／＼と霞をもる、つま琴のひき止でんはるのよれ月  
 霞より月を横さるかり金のまたも霞てこそはくもらす  
 有明の月の残りてむかひ山花よりしらむはるのあけほれ

皇太后陛下の崩御あふせられたるを悼み奉りて 高橋富兄

仰くなる高根の雪の崩れと死くと誠かたよつれ誠なりとは人のいへと誠とともい思これすゆゝしかしこそ懸まくも恐かれともいしりへの大まつりんと聞しめし先の帝れ大御あさ助々給ひて御心をさくさめまし、事おほくはこやの山にいましてはわか大君の大みため數へもあへぬ御いさとの大ましけりとまれさくをゆゝしかし彼れ山れめくる月日の遠長よ千代も八千代もまよませといのりしものを夢かれや夢よあらとすみやかにさめましもれをひさふるよ落つる涙に目もくれて心もあふぬ草木までた、墨染れ色とのみ見わたのしあく悲しみまつる

血になかぬ人よなければ四方の海今日よりしてやいろかゝるらん

奉詠熱田神劍歌

福 井 喜 彦

處女がをど先さひそと、うら玉をしにぬきたり、眞玉手のたまでぬふま、まさむくの日代の  
 みやに、あめの下知るしめしける、す先るぎの神のみことに、おほけあく射向ひまつる、ひむらしの  
 くもの夷ら、ことごとくくよと向けますと、うしこきや皇子の命の、御おかしとひきて行かま、草薙  
 のつるされ太刀、くすしくもとふとき太刀、あやしくもくままた太刀、いかれころ東れのたの、十  
 あまり二道かたて、えみしらを言向々やと、まつるはぬ醜のやつこそ、みちがふに平ふげまして、  
 尾張のあつこの宮よ、神あがふつまりませれ、こゝ思へばたふとくもあるか、うべなくこれの  
 御太刀を、虚見津やまとれ國乃、底たから御たかぬしと、いよくにあふぎたふとび、玉ちはふ神  
 といひひて、大君のおほき御稜威を、わたの外の國のろぎへは、いやとほくういやかすべく、とこと  
 はに守りまへと、益良雄があやまかしこみ、ねぎこと申す

先の御門の六后の宮の神よりまじくを悼み奉りて

饒 村 彬 成

みめくみをつゝむにあまる袖おまたなげく涙乃あふれぬる哉  
 我が袖にみ雪しふれと墨染のきぬのゝるしはかくれさりたり  
 天かけり出ますしそ白雪のくものかよひ路ふりもうつめん  
 きみぬふ涙れ袖に降る雪はちよそむいろとたたとやする

君まさそちりよらふは青山も犬のちみたにもみちしつらん 長 谷 川 福 平  
 うき雲は大内山にたなひきてなみのあめと降るそかぢしき 草 野 正 義

香 村 茂 富

松影映水 未知らぬみもすを川れなりれにそ千代の影さす岸のむら松  
 窓 前 柳 梓弓ぞるのひかたは窓にうつるやなまきと共に長くなりつゝ

饒 村 彬 成

寄 松 祝 こきさみてをつの松原みわたせば果しも見えぬ君が大御代  
 長にかはらぬ御代れた先しには猶松をこそひくべかりけれ

源 義 經 荒浪をふきを先て一君おれと我ぬれ衣はほへあへすて  
 平 忠 度 櫻さく木蔭おぬえゆめにまつやまの浪の花やちりけん

寄 松 祝 とことには榮ゆく御代にくらふれり千代を千度れ松のもののは 長 谷 川 福 平  
 澤 若 菜 つつのゐる澤邊の若菜もぬいてぬ今より千代をつむへかりなり

花 間 鶯 やとよめて音をも鳴くかな鶯のれののみなるかなふなくに  
 四條巖懐古 きみかため巖もちりさくの花さかた香ほりり千代に八千代お

草 野 正 義

社 頭 雉 うみさひて雉子こそなけ白山の森の杉むらさかてにのみ  
 交 苑

川霞 矢さけひのむかしはしらす宇治川や霞をわたるせいの白浪  
水郷霞 すみのねや松よりかくはとねわけて霞にこもるかちけ音哉

千本の舎

春風解氷 吹くとしもなき春のせに磨かれてこぼりのるみうすらさよなり  
海上霞 きこの海おきもはるかにうすむなり常世のこぼりとけ初めぬらむ  
春駒 治まれる御代のはる野の牧かれいさむらひなき甲斐はくるみま  
茶 じめ煮てころすましてわる居れと翁さひすとひとや見るかむ  
鏡 しかそたたくまなくうつるます鏡耻ちてむかこぬひともありけり

春廻言艸

千木廻舎雅雄

貴賤迎年 ともを拜萬次袞龍也

若みつこそそむすひてめ

み衣の紋に照り互る

竹叢春鶯 めこならなくにしの竹の

初日の影はくふ山

しけみか興又床し宛て

峯も麓も隈なくて

なく鶯けひとふしに

松影映水 氷は紐はうちどけて

千代は色ころともる光れ

なみもあださの松影は

社頭梅花 東風やく頃やまやえるの

みとりあるふま山の井を

千木もるすみは匂ひつゝ

ひもどく梅もよありて

うち隠したかた閨の戸に

木か々にひく里神樂

柳は糸たあまろゝた

閨中春雨 日はくれ竹乃夜もすふ

かたひの音も交りけり

俳句

秋

竹

春季二十五句

天文 刈藻焚く女の顔のおぼるある  
春の夜や恩賜の御衣にさきもれす  
橋の上よ火事を見お出るおぼる哉  
酒にうとく煙草も嗜まず永き日や  
君が行くところを霞むあふなり  
行列をさけて馬引き入る、春田哉  
地理 沙干さびし雨に灯ともす梅津寺  
彌次喜多の物かたり行く春野哉  
右せんか左せん、焼野の道の分きたり  
田の隅や目高集る春のみづ

動物 墓に物いへば蝶飛ぶ君の魂やふん

戀をわらう。黒猫少く強うな  
蛙鳴く。一つ家の水車用ゐる。

似而非宗。教家をわざける。

飯蛸は蛸とモなれぬ名なるべし。

人あり我名れ秋竹。修竹何れか真なるやと問ひけるに。

鶯も黄ある鳥とも書さ申す。

植物

焼あどやとげたる桐は木の芽よく

繪の如し。漁村の梅の夕月夜

蹴まりそれて御愛乃櫻ちふらり

人力の幌にいだれる柳がな

木の芽の汁を甘露と申す。愚ある哉

人事

お染美よして久松供す。彼岸あな

出がはりや馬の口とる父愚あま

二女縁遠くまて雛かしづくる哀れある

畑うちや支那の軍が敗けたげな

人も來ず。晝れ灯くらし。涅槃像

送田邊秋洋之大坂序

村上 函 峯

均是利也。利於一身。則謂之私利。利於萬衆。則謂之公利。而不規私利。公利所  
存。則私利亦存焉。吾友田邊秋洋。曩奉職文部。視教府縣。未幾入東京府。掌府學事。其初受職  
也。衆議百出。教學不行。秋洋勉從事。規畫得宜。居六年。置小學者百八十有九。置中學者二。  
府學諸官。皆得其人。而其教始行。於是皆曰。秋洋力能利於萬衆焉。而秋洋不自居功。其亦寧可  
測乎。頃者有人告曰。秋洋辭職。將之入大坂。入某商社。蓋其意在規私利歟。余曰不然。秋洋  
夙從事學。口陳道義之說。心明公私之辨。豈舍公利而規私利者乎。其意謂府學之教。殆成矣。  
吾將大規萬衆公利。聞其商社。請於官。發豫州銅坑。率一歲所獲。不下百數十萬。夫天下之利。  
莫大於金銀銅鐵焉。而銅之利最大。作貨幣。作銃礮。作鑼壺。凡天下有用之物。莫不資于此。  
焉。秋洋拮据從事。使萬衆益以被其利澤。其爲萬衆規公利之功。不亦大乎。比之從事於文  
部府學者。得公利之大小輕重。可不待辨而知矣。而公利所存。則私利亦存焉者。亦可知矣。  
且世之營一官一職者。奔競躡進。爲一身。規私利之不遑。何遑爲萬衆規公利乎。使此輩  
聞秋洋之舉。想當愧死耳。余聞大坂豪商大賈之淵藪也。爲萬衆規公利者。亦多矣。秋洋行矣。  
其必有所合也。

紀鴻宮儼祭事

浦 井 信

名古屋西北四里。有祠。祭大國靈神。稱國府宮。往昔國府所在。又稱鴻宮。國府與鴻。國音相通也。每年

正月十三日。有儺負祭事。其曉。祝官率里民數百。列于官道。捕行旅一名。三薰三沐。以供之祠前。祭畢。負之士餅。衆驅逐之。其人躓倒。則埋餅而後放之。是為故事。蓋季世之陋習也。寬保三年。戴公命禁捕行旅。僧祝不肯。抗言曰。王室之盛。國有國府宮。國分寺。寺祀吉祥天。每歲正月。祥吉祥悔過法。而有追儺之儀。是曰鬼平。又曰鬼走。續日本紀。載稱德帝勅使各國。修吉祥法。三代實錄。載陽成帝復勅行此法。東鑑。又記鬼走之儀。史乘所載。昭々如斯。且我儺負祭之事。出於舊事大成經。公諡曰。大成經者。偽書也。而史乘所載。則儺祭耳。捕人之事。不概見也。况儺祭者。僧徒之事。今屬之祝官。亦為無謂。僧祝曰。昔者照祖過此地。親問捕人之事。僧祝具述之。照祖領焉。今若廢之。不啻背照祖之意。必也明神赫怒。大降災害。又舉織豐氏及瑞龍公朱章。以為證。公又諡曰。朱章者。祀田之證。事不關儺祭也。照祖以舊習難遽改。蓋姑付之不問而已。若夫神降災害。寡人請當之。百姓何罪。且神不享非禮。若必欲之。則邪神耳。可投之四裔。抑必要生人。則祝官自為之。不然。宜以芻人代之。或雇人為之亦可。僧祝乃服。爾後祭日。雇人存其儀。以至今云。

野史氏曰。以人為贊。遺風往々有存者焉。田中邱愚。會過山路。見有雉之離于羅者。則投所携生魚於其中。奪雉而還。村民來見驚曰。是蓋山神之所為。恐或為崇。建祠致祭。縣百金。募人為贊。邱愚即應焉。夜深酌奠酒。食塗盛。放火其祠而去。世傳以為美談。雖然。是特匹夫之勇耳。戴公之智之仁。固非應同日而論也。

除夜

蓉湖漁史

異絲已白果何為。惜月憐花筆一枝。勞我精神猶不止。今霄又賦祭詩時。

新年作

淺樹椒酒小窓眠。風雪霏々意黯然。有夢此間堪喚快。寅賓出日富山巔。

同

高砂萬里競迎春。草木風靡率土濱。寄語南征諸將帥。休忘盜賊本主臣。

送某生之于東京

藤井衡雲

負笈一朝離故關。鞋鞍踏破幾青山。古人有語君知否。學若不成死不還。

除夜

殘燈耿耿歲云徂。回顧平生都夢如。聽盡鐘聲二百八。送來鳥影九千餘。蹉跎事業同梅冷。鬱結窮愁與柳舒。我願明朝迎曆日。寸心唯欲答當初。

落葉詩四首

松心子

樹頭樹底落相爭。亂叩書窗片々輕。絨々翻風狂且舞。蕭々和雨落還鳴。杜陵身瘦詩千首。東野吟成夜五更。猶記年前驅匹馬。江關萬里趁悲聲。

搖落還成宋玉悲。可能重賦送秋辭。暮雲殘樹水空逝。急雨冷蟬風忽吹。送客荒亭人散後。呼船古渡月來時。分明一夜故園夢。看到舊蹤醒復疑。

秋風到處咽悲辛。吹滿乾坤捲暗塵。獨樹店前羸馬客。疎林月下暮歸人。秋懷來處題詩拙。尺素思時叩戶頻。一屋燈光青欲死。煮茶寒夜達清晨。

風物秋來破客心。濃陰昨夢那邊尋。虛窓白日禪方定。一路空山門掩深。撼屋忽疑高捲浪。撫琴聊和病蟬吟。蕭々瑟瑟度寒夜。明日更還空幾林。

賦庭中石

園隙頑々一片石。吐雲呼雨未曾休。憐他皮骨如寒士。好此蚪松真匹儔。性本同禪惟是靜。默而不語又何求。料知歷劫風塵裏。冷視人間身世浮。

登臺

聞說空山老大材。人間有命匪關才。荒雲吐月風吹樹。孤雁鳴秋客上臺。天萬里望家隔澗。夜三更顧影徘徊。書空咄々無人會。歷落星光入酒杯。

眼前加越夜分明。悉取雲烟入客情。群嶺澹分烟雪色。一天冥合海潮聲。閃電截空刀氣老。空林橫影月光清。氣森肅過雁呼去。燈火光搖金澤城。

公園賞雪

乾坤一色着新妝。似厭人間塵壤揚。鸞鶴青天俱皎潔。芙蓉瑤闕謝昏黃。詩從碧海月中得。魂在銀河波上翔。骨冷神清身是鶴。一杯更舉憶梅觴。

記夢

湖山杳渺白雲清。孤鶴迎風時一鳴。玄墓南頭一輪月。梅花多處我詩成。

偶成

閉門謝人事。徘徊何所待。皎々一輪月。清輝不曾改。對之想妙理。髣髴見真宰。一心共周旋。微

軀亦千載。

寄友

人生本寄耳。寄者復須去。死生無他義。何況出與處。青山聊可詫。浮雲固無著。欽君夙軒舉。世外遊仙署。天風輕而冷。閭闔足游豫。振袖弄北斗。蟾蜍伴相步。臙和攀扶桑。紅霞忽欲曙。脚下三千界。微々草頭露。天上有至樂。遂忘毀與譽。人事貴適意。道在息群慮。寄語山林人。此意勿相誤。

批評

本誌第十三號を讀む

(前後よりの引用符)

太液漁郎

批評家の當り任すべき所は、虚心平氣、偏せず黨せず、椽大は筆を揮けて、能く作篇の由て来る所を察し、隱微を搦撥し、幽冥を闡明し、褒貶黜陟敢て私心を加へず、必ずや炬眼炯々紙背を徹するの概なりべからず、若し夫れ批評は定論に至ると、世既不説あり、吾人の復た茲に論ずる所にあらず、

今や窮冬三月六花繽紛満月轉た蕭殺たるの時、漁郎一夜恍惚と去て睫を交ふる能はず、乃ち獨り繁を剔て本誌第十三號を讀む、衰然たる大冊子、亡慮百有五頁の多き、頗ぶる人意を強ぬるに足る、然れども、其文苑欄の豐贍なるに反し、論説欄の寂莫たるは、稍意を滿ざるものあり、吾人は敢て

學餘文を學ぶに士に對し、徒に之を強誘するの頗ぶる安當かざるを知る、然りと雖も、苟くも、身  
専門科の門闕不入れるの同窓諸君にして、日夕攻究之餘、豈お一片の識見以て本誌を收藏すべきも  
れかよとせんや、夫れ本誌は辰章校機關誌あり、辰章校乃元氣煥發興起、赫灼たるを萎靡沈滯  
振とざるを、繫て以て本誌あり、本誌は盛衰は移きて以て我辰章校の消長を卜すべしなり、吾  
人又特は窃に恐る、本誌は由來壹部諸君親密にきて、貳部參部諸君と相乖離するの兆候あるを、  
而して事實は或る範圍に於て、之を證明し盡せり、吾人は貳部參部諸君は、本誌を見る行掛りの義  
理は如く、僅々雜報數件を通覽して以て卷を投ずるの傾向あるを憾む、或は謂ふ、貳部參部と文筆  
疎遠あり、是を以て然る耳、子何ぞ之を責むるに苛酷なるやと、然れども諸君よ、吾人の諸君に望  
むに、敢て流麗艶妖の文辭を以てするにあらず、他か一斯れ如きは、諸君は目的にあらざればなり、  
又其の必要ありればなり、望む所の夫を唯だ諸君の高論卓説を本誌に連載し、文質彬彬華實兼備す  
るにあらんか、同學諸君請め金玉の辭を惜むるを、發奮激勵論説を雜録に各其の研精の餘を投ず  
るに吝なる勿れ、

論説欄、蒐むる所貳篇、前者は講師西田先生はヒュームの因果法と題し、後者は曾我部俊雄君は  
大化の革新に就て(前々號續)なり、吾人の「A Treatise of Human Nature」の著者とてタビッド、  
ヒュームの雷名を耳にとること尙矣、先生は條を趁ひ、篇を積み「Scholastic philosophy」を攻撃  
して、其の迷夢を攪破し哲學は一新研究法を創見せるベーコンデカルト両碩儒より漸次學派の變  
動を詳述し、ヒュームの「ベーコン以來れ……………經驗を以て、真理の標準と……………さて、短刀

直入、直に因果法は本營に入れるを詳論し、印象は吾人知識の唯一なる根元おして觀念の如き  
も、單に不明なる印象なりと、其の極因果法は主觀的習慣に過ぎざるを以て、遂に自己の存在を  
も疑ふて Great Scapite とありたりと、論斷せられぬ、吾人の先生は毎に勞を厭はずして、後進を  
益せらるゝを多謝せ、曾我部君の史論大化の革新に就て、曩ある本誌第十一號の續篇と覺へぬ、  
君は劈頭喝して曰く「吾人は敢て大化の革新を平和的革新と曰ふ」と吾人も亦其然るを確信と、輦  
轂の下、纔に血を蹀むを以て革命の實を擧げまは、或る方面より觀察せば、其の平和たるや誠に君  
の言れ如し、而して君の列擧せられたる平和的革新の原因とかすもの五箇に至りては、吾人亦意を  
異にせず、吾人の疑ふ、君の論證せられたる、所謂平和的革新とは、獨り蘇我氏族滅を以て論據とせ  
られたるよ非る耶と、彼の制度の革新に至りては、則ち流血漂杆の慘なしと雖も、砂上に畫して嘯  
々偶語せるもの寔に尠からずとせず、蘇我氏は暴逆不逞なる神人共に怒る、普天は下率土の濱誰か  
其肉を食ひむと欲せざらんや、若し夫れ當時蘇我氏をして、其の罪數等を減せしめば、壘を深うし、  
兵甲を蓄へ、一方に割據して之が聲援を通ずるもの、必らずや枚擧ふ違あらざらんやとす、天智位に  
あり、猶ほ以て脾を撫して起つ能はず、然れども一朝帝の崩御せらるゝに當りて、海内を擧りて新  
帝の命を奉ずるものなく、尋で壬申の亂とあるもの、其の素因する所、豈に一朝一夕よあむや、吾  
人は實に之を大化の革新と歸す、君以て如何とす、吾人は想ぬ、君の此の論を草せられたる鼎軒  
翁に負ふ所少なからざるを、人或は謂はむ、子の誠に批評の範圍を脱すと、然れども、吾人豈に妄り  
に人を中傷するものなむや、唯だ史論に要する所は史眼炬の如く人は因て動搖せざるを尙ぶの

み、吾人の君に憾みとするところい、其序論の雄大莊重あるに似ず、本論のわけなく龍頭蛇尾の嘆あるにあり、

雑録欄、第一に掲げられしは、浦井恒堂先生の希臘神話集(前々號續)として Argonautic Expedition は經歷をいと面白く、先生特得の才筆を以て記されたるものなり、アラゴナウツの一隊エーリアン海に於て一日風浪乃險にあひ、レムノス島に寄港して女隊の進撃に逢遇し、一隊喫驚し遂に隊將ジャンン女王と婚するわたり、鎮西八郎島巡遊の想ありて、快甚ま、又隣國に大人國あり、人各六腕を有すなど、スウヰフトはグリヴァー本邦の和莊兵衛物語を讀むを覺也、吾人の常小思ぬ、苟くも西歐の文學を玩味咀嚼せんと欲せば、ミソロジールバイブルに通せざるべからず、若し其の一を欠かば、其の趣味の半以上を失はんと、先生津々盡くるなきの豊富を以て、毎號吾人を誘導せらるゝの惻篤なるに深く銘謝する所なり、次は高橋先生乃女郎花訓考にして長谷川福平君先生を請ひて本誌にかゝげたるもの、先生の博覽強記深く古典に通じ、歲餘博引考證註誤を正し、後學を益せらるゝもの少いとせず、此の篇亦其の二、女郎花のをミカヘーにしてをみかめーにあらざる事を遠く古く徴して説明せられり、次は垂綸東涯君の那谷旅はとなりりる紀行文を文体異りて、觀察點を同じうせざるにあらざれば、更に妙味の感なく、徒に人をして飽厭せしむるのみ、君の文体は和文体かぶんか、されど、未だ其の堂奥に上らざるものならむか、往々不熟の處あり、吾人の紀行文に就きて聊か定見あり、請ふ之を義山養愚君の御嶽立山紀行(承前)に於て述ぶる所あらず、こは先號夏季跋涉録後篇として掲げられしもの、文章平易にして、快味深々とて

竭たず、頁を重ねるものと十五、優は紀行文中に一体をなせるも、君の「其人曰く立山越え易々のみ、案内には大出れ大島よかろむ、彼に頼めば大丈夫ありと……主人曰く惜いりか、お前達昨宵佛崎まで来たからに、一寸此處まで涉つて来れば、ようつた、ナニ河水も渡れぬほどぢやない」と地方の方言利用して自己藥籠中のものとかし、己が文を、生動せしめられしは、他の所謂字引的難字を慣用して借屈攀牙徒々讀者を苦めて、文章の能事畢矣とあともものに比せば、未だ嘗て天地宵壤に感なくんばならず、讀んで「何事までも案じはないと沈着き居る科藏までも心を痛め且つ、や無操子顔蒼め嘔吐を催すと云ひ出しては斷腸に感ありき」と謂ふに至りては、描寫眞に迫れど謂ふべし、本號批評欄中藤馬郷君は紀行文の「現形の波瀾内包の波瀾の二種を含む、現形の波瀾ハ文字の上にあはるゝも、誰もか易しとする所、内包の波瀾に至てや、詩觀を持し、詩聖を恐るゝものにあらざれば能はず」と論ぜられたり、吾人不學未だ這般に眞味を解せずと雖も、亦聊々鄙見をき能はず、吾人未だ詩あるものを知らず、先哲の言を聞くは詩は苟くも、心性(Idia)を形像(Image)として表現せるものを云ふとあり、既に心性の表出して粲然章をなすものとせば、其の巧拙はともわれ己が心裡の想像(Imagination)を讀者の眼前に躍出せしむるにあり、詩的觀るもの、至難なる所よきて、亦至易とする所なり、一縷の氣讀者心裡の筋線おふれ、油然暮然むらむらと湧き出づる想像は糸口の凝て精細なる幻影(Illusion)となり、己れ之を目して、脚其の地を踏むが如き感あらしむるのみ、文章の死活詩的境界に至りては能く如此ならむらみ、若し夫れ抽象的議論お至りては吾人の説と異なる論を俟たず、所謂死文なるもの其文の綺麗をらむことを思ふの餘り、己が想



像にあらざる虚像を捏造し以て讀者の喜を買はんとす、烏んぞ、濃厚ある砂糖糕の厭死易に茶漬飯のサラ／＼として厭味あきに若ざるを知らんや、呵々、  
 文苑欄、草野時雨君の落葉混雨ハ小品に記事体よして、枕草紙より脱胎し來るの觀あり、而も釘鉋標竊の痕迹なきにめてたきしふべなり、末尾「つぎを時雨、いつぎを木の葉ともわかちかたまや」と結ばれしは、巧みなと、さばれ、君の此の篇と落葉混雨の末段の妙趣をおきて、他ハ悉く平凡の調たるを免れず、松下雅雄君の送士官候補生歌並反歌ハよるまきりたなり、香村、草野兩君は短歌一望、長風、秋竹諸君の俳句とり／＼もかき調ありかし、千木廼舎主人の今様野邊は津とは凡て十二作を集へ合せたるにて、いづれをそれとすべしと云ふもなし、おしなべていみじり、  
 次ハ函峰村上先生の呂蒙論なり、蒙は吳の秀才、魯肅は高弟なり肅一日蒙を見て嘆じて曰く、子は復た吳下の阿蒙にあらず、士ハ相見ざる三日、目を刮して見るべしと、吾人の想ふ蒙なる者、常鱗凡介にあらず必ずや、時あけてか、雲に駕し、扶搖を驅て滄溟に翱翔するの概あるものなり、安んず常人を以て律すべしものならんや、彼にして芳名を天下に擧ぐらば、醜を萬年流すべし、三國鼎立の時にあたつて蜀漢漢室は裔ありと雖も、吳亦ハ江東の險によりて、一方の鎮ま、能く孟徳の南下を抑えて、漢室の唇齒たり、蒙の長髯公を荊州に擣ます、漢家に對しては則ち賊たり、然れども彼を責むるふこれを以てするハ、猶ほ狂漢を責むるハ暴を以てするが如けんか、吾人少く疑かき能はず、敢て先生の訓示を賜はんとす、浦井老先生の尾張公世家跋ハ簡而明矣と評しつべしや、蜂嶺君は題鐘馗捉鬼圖なるもの未だ熟練の域に到達せざるもの、題を總じて簡潔にして意

切あるをとりとす、吾人は題圖の奇想天外より來るが如きと喜ぶ、想ふよ作者の意匠讀で未だ數行ならず以て其の全班を伺ふを得べしが如きは、猶一層の素養を要せ、君其れ勉旃、  
 漢詩集宛て二十有餘首冷骨、香陽、二子の斯道ハ盡瘁せらる、ハ深く多しとする所なり、香陽子の蓬萊遊囊(承前)中狼烟、青山踏盡入狼烟。決眦奔騰與漢通。一夜遊岬頭子夢。茫茫飛渡野羅天。は悲壯感慨の情見るが如し。

批評欄、中藤馬卿君の才筆何れ苦もなく長篇の評論縱橫無忌勇士の戰場に血戦するが如く、否否寧ろ俊々たる作家諸君を己が自由に操縦せしむるには感服の至りなりかし、雜報欄内有志大競漕會記事、及び秋期陸上大運動會記事は四高壯俊の元氣鬱勃として軒昂するもの紙上に生寫せらる、吾人素と敬辭懇懇生來禮讓お爛々、唯だ其所信を述べて毫も人に下さず、強項自ら持す、其の禮と作家諸君に缺くもの固より吾人の自覺する所、茲に本誌第十三號を評し畢るよ及び謹んで深謝す妄言多罪

馬卿の君に寄す (圈点ハ借  
用文字也)

臨川子

馬卿の君と。満ちたる袋も漏らさば凋ぼむ習なるよ、君には思ふと云ふねば腹ふくれ給ひずや、彼處に名高き披山蓋世の英雄は重腫子なりしと承はれば、並々ならぬ君の性かん時俗と異なり給ひて舞文抑意の支那主義を酌し給はぬ君か先天的英債と覺え侍るよ、何にこそ下賤の性とは歎き給ふらん、われ「獨語」の翁の血液を繼死するよも侍ふねど、不幸ふえて君と反對の宿縁を享受

け、思ふと云はねば腹ふくる、性にて、然りとも云ふへき分際にも在らざれば、切めての本誌第十二號の批評を讀みて降し兼ねる胸の思乃塊を、責任を以て草し給ひま君か情に濕ひて解かまほしさに、嗚手かままくも書き付けて御心を煩らすとはなしぬ。

首を回らせば半歳は昔、賑々たるシホン山下、寥乎と佇み、淙々たるシロアの流を汲んでシナイ、オレツプの詩神を呼び起したる失樂園乃作家詩人、又はあらくに、アルビオン島裡琴を抱いてエオリヤの詩聖を吊ひ高く天外に偉音を求めし劍橋の詩隱を好んで擬し給ふ殘雪の君が、日野山かたて枯骨を投げし湘水の庵方丈の室に、床よりくも十五年の筆折りくべて無言のユメヂーを作さん、とせられ三年籠庵の由來を示され給へまより以來、水や空ある碧玲瓏の阿奴浦乃一夜に、さな責め給ふなのおかきさを拜見し、今又本誌にて君かものせし九有全頁の大批評に、蔭ながら眼を晒らす嬉しさは、更衣れ母君ならねど畏き言の葉を光にておん讀みつる程よ、日頃の目まひもうつゝ癒ひて頭は鬱氣も半の晴れ渡りつゝ、同學の士よりも徒らま長冗わが丈なが、身にも余れる辱なさは云ひ盡さん言は葉草も覺え侍らず、無禮の罪許したまへ、然らあれども薊の花も露り宿る趣なれば、色香れみにて是非せんおは、仰の如く諂諛的讚美的評言ともあるん恐も侍れば、玆は可弱さ腕の筆は命毛を振り起して、能ふべくんば君が表皮一枚を搔搔し、能ふ可らずんば少くとも君か心裡に一片は怒氣を醸さしめん、野心と思ひ立ち侍りぬ。あはれ龍車に伺ふ蠅螂の斧とも見給はざらんか。

されど斯く思ひ立ちつるからに、われは君か綴り給へこれ文を二度は繰り返すつゝ、それ人

耳なれぬ言は葉に何からぬ思の起りとも著るく、又も繰り返されて有難きと本誌か辰章校は機關誌なる趣の慷慨論あり、批評の欄よりちとお門違ひ侍らずやとも覺えぬれど、嚮き九龍齊の主人か山鳥の尾のながくと辨せられつる例も在れば、之れや無くては叶はぬ飛車取王手の飛ひ道具にて侍らん、さりとても亦收穫お先ち五風十雨を祈る農夫たらんを期し給ふ君も於て、艷華に流るゝ傾向を認め給ひつゝも、緒手卷の糸よりも細くほけめかされしは、實は臚なる三日月の木曾の谷間に照る心地せられておん、見らるゝ如く今お於て誓へ剛健、壯勵の氣を鼓吹するなくんば他日の果實美乎、醜乎覺束おき今日此頃、今更に莊子營見れ夢を尋ぬる必要も在らざるべく、詩人の覺悟を追想せらるゝにも及ぶまじ。まかず安石の流を酌まれてくれ若し出でずんば蒼生を奈何せんとても奮發せらまてゝ如何よ、あらずあお恐ろま、その後日に譲りとの仰せ言は侍れば、われは偏へに眼を潤きて君の開幕は曉を待たんと而已、唯、死して後にと返魂香さへ甲斐なき世の習なまば、ゆえに時機を逸し給ひそ、併るも御心注かれし一頁有余の慷慨文字を、行く水に空しく送らんとも有繫なれば、い言問はん馬郷の君と、君は如何に進歩と退歩との意義を定め給ふか、君か進歩と本誌の結構に於て歌われつゝなほ退歩を艷華お流るゝ傾向認められ、と、鋭犀精緻の筆の跡、床かしくも嬉しき極なり、さはれ進歩は何處までも進歩に於て退歩は何處までも退歩なり、弱点豈に焉くんや美所なくんや、若し失れ美所を以て弱点の潜伏と許るゝ進歩の意義も退歩の意義をも併有せしめば、美所と云ひ弱点と云ふ區別あらざるべく、進歩と云ひ退歩と云ふ意義存せん様もあらず、然るをこゝや斷言はせられずとも、進歩ある意義と退歩の意義をも併有

とるものにあらざる耶、その美所にその弱点の潜伏するもれにあらざる耶とのちと似氣なき御疑に待たずや。例令その美ある所に弱点の潜伏せざるを、進歩せる者の内に退歩せる者ありとするも、退歩ハ退歩ありて弱点ハ弱点なり、如何での美所となし進歩と見做すを許さんや。若し君おして進歩の境界と美所の境界とを正しく定められらば、其の裡にハ弱点の潜伏を許さんや。若し君おして可き者に在らず、若し君おして進歩の境界果して退歩の意義の存在し、その美所の境界も果して弱点の潜伏するあらば、その美所の範圍の濶さに失え、進歩の範圍の廣さに過ぎざる誤なりと知り給はずや。空氣の水中に混ざる在るも遂に水お在らず、高峰の花は柳曳く雲も擬ふとも嘗て雲に在らざるあり。

仰せの如く、こか鶴首以て本誌第十二號の到達を待ち、佗びより大勢力、創設以來始めて付せられし夏季跋渉録も重きを置けてなりた。然かあれども、それの依りて青山白水の間に紫明の氣を養四れたる同學の諸子が、天地乃光妙お接去自然の景象に感じて心中に湧出する詩的觀とや承はる、同情を垣間見せんとは思寄らざりた。蓋し自餘の同學諸君とても強がち本誌に於て散文の詩と讀まんどの思ひ給はざりしなるべく、編輯諸君の深意もよもや君が下せし定義に従ふを旨とせられしにも侍らざりなさん。これ故にわれは跋渉録を讀みても君をぞれ失望は逢はざりき、五分を幾度か過せしうごも敢て睡神の魔にも襲はれざりた。れもふに本誌に付せる跋渉録は以て同學諸君れ銳氣を誌上に潑刺たらしめ、わが黨乃諸君が活動の始末を同友の間へ告げて、聊る校風發揚の機を計りしもれなさんか、われと君が附録としてわざと副へておがむる

むる程は者からずおかすを妨げず、あらず不眠病を惱む同學諸君にして、本誌の爲に魔睡劑を借り用なきに至らば、寧ろ本誌の致す所を謝さん、その多病の士に富むは喜ぶ可き次第も侍らざるはなり。され馬卿の君よ、此の如く論じつとてそれと本誌に載せる三章をもて満足せる者と認め給ふ勿れ、それはこの三章をもて完璧の紀行文なりなと、詔諛する者あらず、有体は曰應ばわれも亦彼乃三章をもて三作家が平素は技量乃爲に惜む者あらず、少くとも之の点に於ては君が後に立たざる可き。唯われと前述せる位置にて之を眺むるが故、君が三作家は對する批評を少く不條理なりと信ず。君見ずや三作家は各特殊の形管を有して本誌知名の作者なるを、若し夫れ君にして彼等が詩的觀念を窺はんとおさば作家諸子ハ別に底底お藏する金玉の稿を示されしなるべし。誰かと散文の詩でもものとして詩神は聖壇に一枝は花を捧ぐるを望まざるべき、されど特別ある場合を觀んで全般に推論すると論理の許さざる所、阿奴浦の一夜に萬古歳と經て變ふ自然に、悠久流る、銀河の洩く聖水を浴びて折ふの觀、有耶無耶の想と走らせ給ひし如き、所謂散文の詩よて詩的觀にも富み確かよ詩神は聖壇を汚さぬ紀行文の上乗なる可きか知らねど、終始此の如くならんは流石にケンブリッジの詩隱も擬せらる、君にこそ望まれる、なかよく搔撫牛は企て及ぶべき業あらず、れもふに三作家も詩人を任じ給ふに在らざる可く、少なくともかの紀行文をもせられし時おは詩人を期えて寫されしに侍らざるべし、然るを詩的觀もて批評せられし作家の不幸如何にや。

さり乍ら既に詩神乃聖壇に敬虔の芳香を匂ひてミューズの靈容に觸れなんを欲す、苟くも捧げて以て壇上を汚がすの謂あらば之を排せざる可らざるは君を待ちて知るは在らざるなり。古往今來、數かぎりなき錦心繡腸の天才の士が、毛穎を驅り雲烟を飛ばして果ては冷かなる零墳の下に落魂の夢を辿りてだよ、跪き難き詩神の聖壇に、われら如き至りも淺く黃吻の輩が、恣まに詩神々々を繰り返すのそも、畏き次第に侍らざるや。さりとて詩隱を以て擬せらるゝされ人乃君に於ての或は詩神の聖壇に咫尺一給ふとも、本誌は辰章校の機關誌にして強ちに詩神の爲に設けられたる者に在らず、本録また元より然らざる可し。規定に依るに本會員たらん者もよしやその掲載の撰擇は委員諸子の手に屬すとも、互に胸襟を吐露するの權を有する者なり、必ずしも常に詩神々々を省みて規矩の間にさまよふを要せんや、あらず詩神を唱ひてのいかでの似而非ことあふんすといながら、汚さん迄も繰り返さぬを床しけれ。

君は波瀾の餘波讀者の骨髓をうちて來るあるを以て紀行文が篇となすものとせられ、情その波瀾を現形と内包とに分ち給ひて、現形の波瀾は文字の上を表とるゝものど斷せられたり、抑も文字に表とるゝ波瀾とハ何を意味さき給ひしや、他の二作家は紀行文に欠くべからざる照應の點に留意注心されたるの痕跡紙面に躍如たるも豊泉氏ハ只管長文をつとせられ、いかにやとなを給ひながら、五個山紀行瀾もて現形の波瀾に於て三文中最も成効しとる者とせられたるを見れば、文字に表はるゝ波瀾といよも照應などに在らざるべからず、然らば内包の波瀾を待ちて言語の上に彩とる波瀾を指されたる、五個山紀行は内包の波瀾少しもなく口上立派の序幕所作事ある趣承れば、内

包の波瀾を待ちては波瀾にあらざるや明け去、わはき水よ浮べる月影と如何に鮮なるなとも拾ふ可らざるは是非た極なり。且つ夫れ記行文に必要な照應紙上に躍如たる御嶽立山紀行をもて、天地れ景台に應ぜる現形の波瀾も十分老練密熟の筆路を以て成効したりとは何に基きての打算にや。わき君か推論の怪を指摘せば、漢文直譯體(?)にて書かれどその上字引的難字を好みて用ゐられたるを前提として、五個山紀行は内包の波瀾少しもなしと斷せられたる邊にても見らる可し。一般に云と、夏季跋涉録に對せる君が批評はわざと、劈頭に副へらるゝ程のもれからず。若し君が認めらるゝカアライルの面影と呼び來らば、君が君に對して本録の批評を More like a cloud-field than a distant continent of firm land and facts. となすをも彼は首肯せらるゝある可しや。

論説及文苑は兩欄に對せる君が批評はわれ疑なれと之を省きつゝ、されどその君が批評を正鵠なりと云ふ意お侍らず、まづ君が意れ君と同一かどにも在らず、まづは唯君が批評として何處までも認めたればなり且つやこの度の批評は君が尤も心を注つしは、おもぬに此處は在らで彼の跋涉録と雜録とに在りつらん、殊に君が詩神に聖壇に捧げ給ひ筆の花は何時ぞ雜録の園に咲きつるを見れば、蓋し雜録欄の批評と最もお得意のものよ侍りよあるべし、いざや名の付様もなき種々沙汰れ散文が宿場お踏み入して、思慮存分心を盡し吐き散らし、君が批評の跡を尋ねばや。

願くは馬卿の君、まばらば、茲に二個は牝鶏が家鴨の卵を抱くを假定せられよ、然るに孵化して雛となり水上に泳ぐを見るや子故迷ふ心も母鶏は雛の輕擧を危ぶむならん、さりとて元來その性

を異にする故に如何に藻がくとも雖は母鶏の心を問はざるべき。此の時に至りて君は雛の従はざるを攻むるか將又母鶏の愚を笑ひ給ふか、蓋し此の疑問は君が下せしシヨウペンハウア語録の批評を兩斷するものなり。シヨウペンハウアとは誠に近來厭世派の大哲學者に相違なるべし、然かはわれどもT氏のわれらも紹介の勞を賜はりしは彼が語録にして、唯に彼が怒り散らせし日常に放言を抄出されしのみ、決して彼を紹介せんとし給ひしには在らず、故に紹介せられし語録に、その特性の厭世觀なる沈痛悲壯は詩的詞類は一句もあらずとて焉んぞBT氏を攻むるは理やある、われらも君が所云孰にせよ立派に暢ひたる譯文の筆を以て、彼が半面の性憤が慥に現はれたる、丈まで、既ち十分介紹の勞を謝すべき義務ありとおもふ、然るを水上に游泳せりとして雛を咎むる母鶏の心は何事ぞや、況して孵化の勞をば致さざりし君に於ては、如何てかBT氏にシヨウペンハウアを紹介するは責を全ふせずなど、嚙を付かる、は權あるべし、よまや哲學者なるものは情想以上登りて毎に理想を逞ふする故ふるの言行には毎に聯關せる一條は綱を有する者ぞととも、例令その聯關あるも乃、みを以て一個は篇章を組成するも哲學者は語録を編むも乃、大心掛なぞとするも、唯に沈痛悲壯の詩的詞類は一句もあらずとて吠え掛る心根は如何ぞ、若し君にして紹介されし語録も厭世觀なる沈痛悲壯の詩的詞類の無かりしを飽足らすべし、宜しく君自か之を尋ぬるか或は地でも掘りてシヨウペンハウアと面會の上彼に問はる可なり、何も血迷ひてBT氏を責任を全ふせずなど、追及せざる、木に縁りて魚を求むるは愚の極と覺え侍るに備ても心得ぬ馬卿の君が所業くな。BT氏と君が爲し一滴は汚をも流さざるべし、あらず心竊か笑を醸

玄給へりならん。

次きは内藤柳外氏の阿奴浦の一夜なり未完なればとて省かれ給ひしハ有繫は自著自評を避けられけるまや、御嶽立山紀行は未完ながらも御批評に預りしものを、思ひ起せば往昔虛子「吾妻」を自評せしとて時久く文壇の名將達も叩かれたりとも侍りしかど、シルレル、ハウアとやら申す獨乙の大家の自評を詰りし者なかりし趣あれば君にも序であら自評せられて如何なりしか、所云散文の詩、と承る紀行文の眞趣を指示する、もわれら後學を益する所深かるべかりしに、何となく物足ぬ心地のせられてわれら奮庸生り佳作戀瀬川の段に移りぬ。夜な、出る辻君や千代の契を鳥追迄も引用せられたの御説明、日頃御熱心の程も思ひやられて嬉しめぬには侍らねど、如何に確乎たる題笠を着ざる有難味に、思ふ存分心の儘に吐き散らし得らる、本欄の批評なきバとて、批判者の言の葉を讀者は心を刺撃せずとの理もあるまじ、温泉場の風俗が亂れ勝ちなるの思ふ存分心の儘を行ふ故に侍らずや、この故にわれは君か認め給ひし本誌が艷華に流る、傾向どの此處等わたりにはほのめき初めしとを思ひ侍りしに、さうでもありぬ可き辰章校乃機關誌に、殊更に西鶴の流を酌まれて戀ながら戀のみ思ふ戀心と、圈点打つての御引用は何事ぞや、此くても君は艷華に流る、傾向を杞憂せざる心構の士あるかや、われは決して古人の語を引くなかれと云はず、西鶴の言なきばとて用ゆる勿れと云はず、唯君少しく思ひ見給へ、物心なき天成の小兒に妖怪の恐るしきを談りて、併かも世に妖怪ありと思ふ勿きと云ふ人あらずは誰か其背を理答のざん、蓋し先入主とあり易は道德先生の仰せを伺ふ迄も、妖怪は恐るしきが小兒は思想も

感染するはスベクテールは問までもあるけし。この故に彼の小兒に去て妖怪あるを信じたりと  
 せ、彼の人を責むるは何の權かはある、子に親に従ふべし一点張の論理もてのみ推され可き者も  
 も侍らざるべし。幸小辰章校にハ物心なき同士の士おしとてわざ／＼眞紅／＼の寫紅葉、もつれ  
 らるる人情と云々せられしか。或はその人情の極まる所と示せしも吾か言ふあふずとて過さ  
 れ給ふる意か。如何に匡廬乃山は千古不變の者ありとも、雨となり雲とあふは觀者の心念亦従ひて  
 變はる可きを思ひ給はずや。馬卿の君よ、われはマコーレーの評を借さしめられしか。以て Not only  
 astonishing us but offensive to many of his readers と云ふと憚らざる可し。寄語す馬卿の  
 君、思ひかへさせ給ひし責任を以て草すとせ嚴めしき言は葉は、矢張り忘れ給ひて行く水にうき  
 けされど如何。

終りに臨みてわれはそは二個は感謝を忘れたり。それ一はわれは以上論つゝひし條々も作家に  
 侍らずして下々の痴言は君か御心を惱ますことあり。他の一は猥りに殘雪、柳外の雅號を以て藤馬  
 卿の君と目せし事なり。然し乍ら責任を以て草せられたる以上之實名を以てするとも雅號を以て  
 することも君に於て云爲せらるゝなかるべし、且つ夫れをれにして迷ひの雲に遮るゝあるは君  
 か喜ぶ所にあらざる可し。故にわれは信んず二個の感謝は對ひてハ馬卿の君ハ快よく許るし給は  
 んことを



雜報

皇太后陛下の御崩御

青山に棚引く雲の末絶えて我か至仁至慈ある

皇太后陛下は一月十一日を以て神あかり給ひぬ吾人は御病氣御大切に  
 赴かせ給ふと聞きしより胸さわぎ心た乃くきひたすら御平癒は程を  
 祈りしと思ふ誠のこるしなくくも悲しき報に遇ふぞ切なきあは  
 れ哀しきかも藐姑射の山の松長く翠は深く千代八千代盡せぬ齡を重  
 ね給はれと願はぬもれをなかりしも乃を空かきくもりふる雪よ折ふ  
 す竹のよの間の嵐に消え給ひ桂の光再び仰く術をくかりぬぞらでた  
 りし光り勝なる冬空誰か枯野乃露に袖ぬらさざるへき實に赤根さ  
 す日を照らせども鳥羽玉の暗夜に惑ふ心地しく悲しきの遣る瀬ぞか

きははれ三越路の空立迷ふ狭霧こそ吾人が打嘆く息にこそはれ

臨時休業

一月十一日午后、仁慈侘天なる我が 皇太后陛下が、御病氣御大切を渡らせ給ふ由の公電に接し、我校職員學生の謹慎静肅、ひたすら御本復の程を祈りつゝ、あくる十二日憂々歌々として登校せしに、悲しや一片は揭示は扣所に張出されて、一同の袂を絞ぐり死

皇太后陛下昨日午後崩御遊ハサレ候旨其筋ヨリ公報アリタルニ付本日ヨリ休校ス就テハ校ノ内外ヲ問ハス總テ謹慎静肅ナランコトヲ要ス

一月十二日

第四高等學校

右の揭示に接するや、吾人恐懼に堪へず、専敬虔の意を致して、聊り微表を表奉れり、此の休業ハ五日間ヲ終へしも、尙東京御發棺及ハ御大喪の當日ハ、謹んで敬悼の意を表して休業せり

各部の謹肅

大喪の令下るや、直に我會の各部に肅慎敬虔の意を致せり、即ち劍術柔術兩部は寒稽古ハ、十二日より、一週間之を休止し、亦二月二日御發棺の事仰出さるゝや、一日より寒稽古を廢止せり、其他は各部に、大喪中(二月十日迄)學藝、運動總て一切は演事を廢止する事とせり

大喪中の心得

一月十八日左に達ありたり

臣民ノ喪期間左ノ趣旨心得ヘキ旨其筋ヨリ訓令有之候條其旨心得ヘシ

一 謹慎静肅ヲ專ラトシ深ク敬悼ノ意ヲ表セシムヘシ

一 制服ヲ定メタルモノニ在テハ黑色ノ布片ヲ左腕ニ纏ハシメ其他ニ在テハ左肩ニ適宜之ヲ添付セシムヘシ

一 制服ヲ定ムルモノニ在テハ黑色ノ布片ヲ以テ帽ノ飾章ヲ覆ハシメ其他ニ在テハ帽ヲ卷カシムヘシ

一 學校紀念式運動會修學旅行等ノ催シヲ禁メヘシ

右揭示ス

一月十八日

第四高等學校

大喪中ノ我校

降りまざる雪をのぎて立つ二疏の國旗、常ならばへんぼんとあて勇ましかるへきを、上は附せし黑色の紗片に、何となく物りなしく、まいて入るもの出づるもれ、皆一定の喪章を附し、面に一種悲哀の色を帯び、慘として亦肅たる有様の、これ大喪中れ我校など、毎年盛に行はるべき新年宴會と、直ま之を廢する事とあり、我會の各部の煥發すべき萬丈の氣焔と、暫く之を抑制し、常からは外と深雪を埋もれたれ、扣所は専ら團樂れ場として、放言壯語、諧謔百出、暖爐を圍みて、高笑ひを躰をよるべき時なるを、寂々冥々、殆かも水打ちたらん如く、亦無人の境とも思はるはかり、愁雲全校を包塞して、皆敬悼の意を凝せり、

嗚呼我曹のこゝに大書せん、

我校と大喪に際しよく謹慎の誠を致せり

遙拜式

二月八日 英照皇太后陛下が 御靈柩を、京都後月輪の陵に藏免奉るは日、我校職員學生の、恭しく遙拜の式を靜勝館に擧ぐ、則ち館の西南側に壁代を垂れ、八脚の高机を置き、新薦を以て之を覆ひ、玉串一對を供へ、誠恐誠懼敬んで西南の天を拜し、校長誄を捧讀せらる、其聲嗚々然として斷腸は響あり、一同歔歔涕泣、中々の聲を放ちて思はと慟哭するものあり、次に校長玉串を奉り、最敬禮を行ふ、式終て遙くに西南の天を望めり、雲なたらに行き風空しく啾々たり、當日校長か捧讀せし誄之を卷首に掲ぐ、諸君願く之を誦讀せよ

迎歲辭

寒嵐雪裡、丙申三百六十有余の歳華は、倏忽、轉に千秋の綠穠のなり、嗚呼、此の祥氣に膨脹して瞬れ間に去りて天鷄三聲、旭日醫王の山霽を破餅蘇れ間に聖代と祝ふ、抑も亦樂くらざらんやれば、丁酉麗新乾坤の越路の空にも回へり來 飜りてわれを懷を沈め竊かに去歲は經蹟を探ぐ望ぬ、即ち下風に御眞影を拜して靜かに頭を擧 れば、冷汗滿背、坐ろに追想は耐えざる者あり嘗くれと、千代田の大城に瑞雲たなひぎ、御溝は松て企てし校風論の如き、これらが未だ筆を染影長しへに動かず、南郷北里、惠風に謳歌して卒むるの余地あかりし者に在らずや、蓋言辭諷

劣、諸君に才藻を致す能とざるを元よりわれも期せし所、唯、諸君の友情を仰ひて聊か一片の赤誠を獻せんとせり、併りも伯樂一度去りて馬群遂に空しく、徒々に紫驪を追ふて鞭韉を加へしと雖も、驚嘗て驥たらず、前跪後倒、計らそも袖を噛みまむ夢の奴となり了りぬ、あはれ思ひと背するは豈に獨り巫山の夢れみからんや、然りと雖も落花梢にかへるの季なく、逝水再び回す可らず、今や一陽來復とて萬象盡く新まるれば、願くは諸君、われか罪を秋風に拂去りてわれをとして新硯池に向はしめよ、或は幸ふ所期れ一端を盡すを得んり

天惠れ好期

朔風獵々として飛雪天地に滿つ、此地が殊に天惠を蒙むるの好期は今や正に配せり、試みふ少まぐ吾か愉快とする所を語らんか、寒雲漸く收まつて雨雪こゝに霽るれば、十里の連山眩々として玲瓏玉の如く、滿目は寒景晴朗明徹なる時、百尺の樓臺お踞して放歌高吟する、之吾か愉快とする所なり、空林蕭條として寒鴉枯木に憩ひ、田野荒涼として狐狸芒叢は隠る、の時微吟低回逍遙を恣にまると、これ吾か愉快とする所なり、若し夫れ寒飈怒吼樹を抜き屋を破り飛雪紛々亂れて煙の如き時、短簑輕笠積雪を蹶て狡兔を臥龍山麓は追ふは、これ吾か大愉快とする所にまて、北溟の怒濤澎湃として百尺高く萬丈の白泡飛て散亂する時、一葉の端艇を蓮湖の湖畔に放つ、同じく吾の大愉快とする所あり、其他凜烈たる寒氣肌を劈き指を墜すの霜晨は、十斛の冷水を浴び竭して、蓬々たる頭髮を漸瀝たる寒風に梳くは、これ吾か愉快とする所にして、夜半荒鷄を聞て蹶起し、雪は冴え渡る光の中は於て、傳來の寶刀をのぎて彼れ團々たる大月を切り、精竭き力究まりて倒るゝに至りては、誠も吾か



最大の愉快とする所、噫以上の諸快北國の寒に遇ざるより、誰か之を味ひ得ん、寒なる哉寒なる哉、こと實に天か北國男子に特授くる賜物なり、須らくみの天恵を辜負するなく以て男子意氣を養へ、偷安逸惰爐を擁い煖を貪るは、隱居の死傷のみ、我校六百は健兒、希くは此徒輩をかかふん

岡村博士を送る

莊周の夢、探り見れど茫莫たり、陽關三唱の離歌、悄悄獨り祖席の悵緒は堪に難きを如何んせむ、百年の神契手を江頭に分て、駱馬山をふめと、萍蹤遼遠また何れれ日か杖履に従ふの期を知らんや、人情の麗美なる、同樹の蔭に憩ふ燕遊一夕は同志だよ、猶依々たる傷神の別はするあり、況んや苟も生と成り師と仰ぎて、欣々然、其の講筵に連なるを樂みといたる多年鴻誨は恩師と別るに於ては、聚散離合の憾、涙あるもの

誰か歎歎一擲の嗚咽に伏せざらんや、博士職を本校に襲ゆや、恰も紛擾の餘波を受け、萬機雜然麻を亂したるの日なり、此時に當り、拳々翼々として誠意職責を致し、夙夜章思、死々として懈らず、宿弊をたち、精粹を蒐めて我動植物は整釐上、又些毫の秕点勿らしめざる者之實に先生の勞なり、五星霜の長さ、落花繚亂水は流るゝ韶光を趁ふて、鸞毛片片風に駕するの冬、未嘗て一日も校課を棄て給はざりしもの、獨り先生あるを識るものと、先生紀聞該博おして論辨奔放、學はさながら春花の艶麗なるが如く、辨と造父は驛馬を馭去て峻坂を下るが如き、徒に教ゆるや孳々、言語彫繪なを、惘々人を誨て倦まず、生を導くや恂々、訓導私なを恒に赤心を人の腹中に推し、箴言教義悉く皆肺腑より洩る、その諸生の一たび講筵お侍するもの、薰然とまて風標お靡服し、相率

て聲咳は接せんことを願はざるはなま、謂らく永く先生の教下に在ると得んと、圖らざりき、

山川深沮す、轅西するの朝、先生莫々は姿を加へて調護せよ、謹んで送る。(不眠坊)

劍術柔術寒稽古

一朝突然として解職は事あり、行李匆々、正に京城お歸耕し給はんとと、哀れ夢ばかりの縁や、われは再び峻手ふる先生は風半に陪して、器度洒落、響々珠を綴る明眸の雄論を聴く能はざるを悲む、一念茲に臻る、後會は憾と焉んぞ禁せん。

男子由來意氣を尙ふ、丈夫苟も冲天の氣魂あふ、居り難きの困難好んで之に居り、忍び難きの艱苦喜で之を忍び、須らく心身の鍛鍊に之を勉めて、以て元氣乃充實を謀るべきなり、媿安姑息、笑て辛慘を嘗め盡す底の素養なきもの、焉んぞ丈夫の眞骨頭を庶幾し得べし、苟も事の何たるを問はず、常人の逡巡する所好で之を踏破し去るは、養氣の最良方便なり、況んや之を武の精粹に試むるに於てをや、我校幸に幾多の健兒あり、寒飈怒號樹枝折れて聲ある時、荒鷄に衾を蹴て起ち、跣足膝を没するは積雪を踏みよぶりて、四隅ほの暗く人顔定かならぬ無聲堂に登り、氷は詰めよらん如き板間を鳴り響か

嗟呼今より以後、一條の客路道は遙かして魚雁希し歸るも、不忍池畔は春風吹た渡る折は、近た邊りに先生の在すと思はん、墨田川原お櫻咲々頃ば、恙も無くて先生の見ますと覺さん、振りはへる袖は變るとも、寶達氣冴えくれば、花と紛亂碧雪の越路の空に降りしきる夕は、餘念もかく北溟の健兒が、岌々として學程の峻岨を辿るの時とおぼせ。

時と維れ陰寒凜々指を墮すのみぎり、雪霜百里

し、丁々憂々、いささかの聲を吹きさす北風

ふ競はずれ士、日々四十を降らず、搏虎掣龍の活劇演じ終て、十椀の白粥に鹽ふりかけて、餓ゑ餓ゑたる空腹を充たえ、一切の澤庵漬を争ひ喰らつて阿々大笑を、嗚呼神龍の卵や實お此間に孵らん、希くは壯膽一世を空うして、奇氣北斗を動かすれ士輩出して、以て我校の盛名をか

敢て滿校乃有志に檄す

風刃凄として激し、奇寒稜々肌革を噛む、白雪三千里、皓々として一点は塵埃なく、人は密室に坐玄魚は茂藻に依る。維れ正に健兒が歳寒松柏の酸節不殉して、陽春群葩に魁するを期するに時にあらずや。願れ猛冬駕を狂げて風伯の狂號、晨夕を撰はず、一夜凜然、凍寒大に臻り、凝氷蓮湖の漪浪を封鎖して、迢々たる堤畔、參差星辰の帽影絶えてより、清江夜流れて櫓聲の呼軋寶達嵐は凍ゆること殆ど三閏月、寂たる大

野村比濱、三艘の短艇、聞然として擅に冬眠を貪るもの、豈お我勃躍たる艇員の素懐に背らずと謂えんや。

客年の仲夏、我艇隊は昂然征旆を滋賀乃浦に進発て、二高れ艇友と琵琶湖上は驅進し、鼓旗堂々、百鍊の鐵腕を振ふて、雌雄を一呼に決せんと覺悟して成らず。秋雨蕭々、無聊脾肉は嘆を歌ふて、縦横北溟は鯨鯢を叱咤し盡し、三冬の初、僅ま牙旗を檄して戰袍を解たりしが、何んぞ計らん、第二高等校の艇友、竊ま鋒を此間に磨き、籌を隱微乃裡に畫して、礮然、又突然、矜莊なる宣戰れ大羽檄を送り來らんとは。廿九日(一月)戰檄我手に落つ、要に曰く、今年春風駘蕩人は適するの時を期きて、帝都に會し競漕を試み度候、暑中ハ兎角疾病等も生じ易く、且一高の春期競漕會を毎年四月十日と定り居候故、來賓競漕として其中に挿

入を請ひ候て、極めて好都合と存候故可相成其時に執行仕り度候、何卒御承諾被下度候此義一高も承諾可致と存候、然らざるも………何の道四月を以て東京に執行仕度候云々。

嗚呼、雄潔なる二高艇友の襟度、歴々として讀むべし、我部微力自ら揣らず、既に客歳の事あり、今に及んで何んぞ逡巡骨を砂漠に曝らすと

厭はんや。四月、五月、果た盛暑れ候と雖も何んぞ撰はん、琵琶湖、墨堤、果た松島灣に於て

するも焉んぞ辭せんや。甲兵を收斂、戎衣を理し、奮激慷慨、快然として應戰れ書を飛りし。

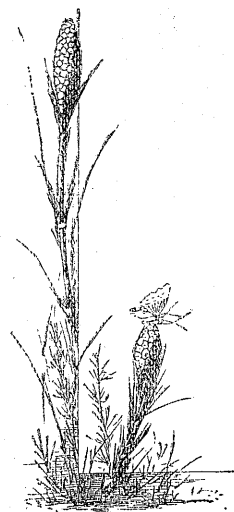
聽て櫻雲靉靄彩霞に煙り、十里の堤上都人花に酔ふの晨、孤軍長驅、落花れ雪に征衣撲た發て、校袴の靡く處、豪然霸を墨川と争ひんと欲と、成敗利鈍豫め期す可らざるも、道路遼遠として勞費亦頗る嵩む、願くは此の際糧食を充實おし、餘裕を金穀の供給お籍りて、兪肴捧觴、一意戰

闘の後顧をかかろし先んふとを想ふや切なり。伏て乞ふ六百の同學諸賢、我艇員の慘憺なる策慮と、我撰手の過大なる責任と、我校聲の伸張する所以とを顧眄し給ひ、須らく一片義俠乃腸を絞りて、應分の賞を割き、以て我艇隊の清譽と戰費とを救済するに躊躇する勿れ。謹て檄す。

卅年二月十日

短艇會





# 投書心得

一 投書は本會原稿用紙に限り御認めありたし  
一 長文と雖も全文を寄贈せざれば掲載せざ  
一 雜誌上より雅號のみを記載するを許せども姓名を必ず編輯委員まで御報道  
あるべし  
一 學理上の論說諸小會の記事雅文詩歌等續々寄投ありとて勿論言の或は政治を  
論じ或は徳義に背くもの一切掲載致さざるべし

明治三十年二月廿二日印刷  
全 年二月廿五日發行

編輯兼發行者

河 原 始 二

印刷者

春 秋 原 在 文

發行所

第四高等學校北辰會

印刷所

活版合資會社

金澤市高岡町三十四番地

金澤市廣坂通第四高等學校時習寮

金澤市石浦町七十六番地

